

森林技術



《論壇》丹沢大山自然再生委員会の活動
—市民参加から協働へ—／木平勇吉

《今月のテーマ》私たちの大学校を語る

- CPD-012-解説-004 林業技士再チャレンジ制度ほか
- 平成19年度 林業技士及び森林評価士／森林情報士 合格者氏名

2008

No. 793

4

豊かな発想と専門の技術で
災害防除と環境保全に取り組みます。

営業種目

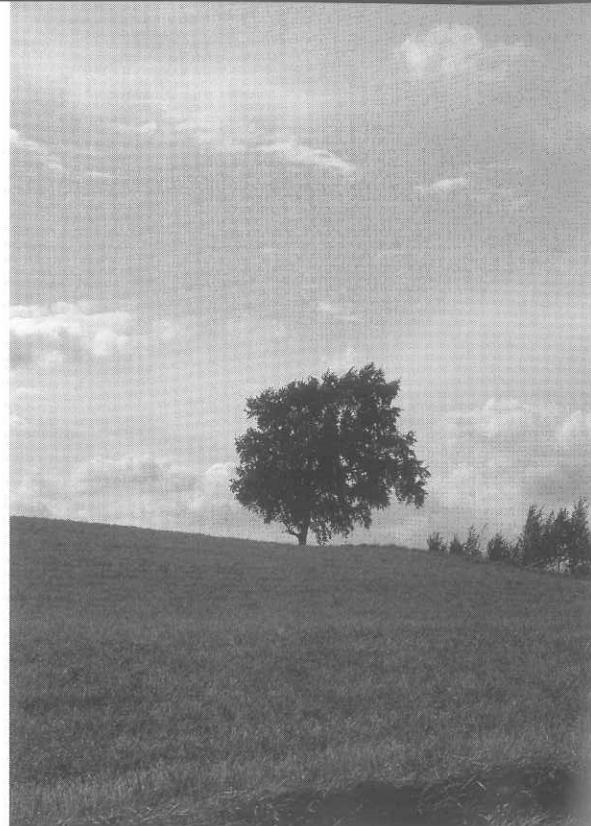
- 地盤改良工事
- 法面保護工事
- 杭・連壁工事
- 管沈埋工事
- 地すべり対策工事
- 環境関連工事



ライト工業株式会社

代表取締役社長 佐丸 雄治

〒102-8236 東京都千代田区九段北4-2-35
TEL.03-3265-2551(大代表) FAX.03-3265-0879
URL:<http://www.aito.co.jp>



コンパス測量が大きく変わる



TruPulse 360°

精度証明書付 トゥルーパルス360°

1. デジタルコンパス内蔵レーザー距離計
2. 重さわずか 220g
3. 個別精度証明書付
4. 単三電池 2 個で作動
5. 傾斜地でも精度を維持



コンパス測量システム

専用ソフトウェアのご使用により、現場での精度確認が
可能になります。立木位置図作成にも最適です。

GisSupply

<http://www.gisup.com>

カタログ請求・お問い合わせ



0800(600)4132

株式会社ジーアイサプライ 〒078-8350 北海道旭川市東光10条1-3-20 TEL 0166(37)0035 FAX 0166(33)0335

森林技術

4. 2008 No.793 目次

論壇

- ## ② 丹沢大山自然再生委員会の活動 —市民参加から協働へ—

■今月のテーマ／私たちの大学校を語る

- ⑨ わが校森林・環境コース紹介
一群馬県立農林大学校 石田 敏之
 - ⑭ 明日の地域林業の担い手を養成
一静岡県立農林大学校 林業分校 伏見 裕之
 - ⑯ 自然のなかに 心のなかに 森林を育てる
一長野県林業大学校 武田 雅宏
 - ㉔ 地域林業の担い手の育成確保のために
一島根県立農業大学校 森林管理科 菅田 熱
 - ㉙ 後進を育てるここと、私の思い
一京都府立農業大学校 林業課程 上家 祐

■報告

- ③ 岩手・木質バイオマス研究会のあゆみと現状・課題
—木質バイオマス普及パンフレット『火のある暮らしを楽しむ』の
発行にあたって—…………… 岩手・木質バイ
オマス研究会

■コラム

- ム ⑯ 緑のキーワード：
木造の防耐火構造／有馬孝禮
⑰ 本の紹介：入門 環境保護と森林
／井上真理子

⑯ ひびく：京都議定書6%削減約束
の達成に向けて
⑰ こだま：メタボリック症候群
『まちの森林(もり)づくり10余年』
一宮下國弘氏を偲んで

連載

- ⑬ 森林系技術者コーナー：CPD-012- 解説 -004-200804
12. 林業技士養成研修の再チャレンジ制度ほか 林業技士事務局

⑭ 山村の食文化
32. そば (2) 杉浦孝蔵

■ ご案内

- 13 森林・林業関係行事
35 新刊図書紹介
40 平成 19 年度 森林情報士 合格者氏名
41 平成 19 年度 林業技士及び森林評価士 合格者氏名
45 本誌原稿執筆に際してのお願い
46 協会からのお知らせ……第 63 回通常総会／協会のうごき／訂正／投稿募集
「雑記」

〈表紙写真〉 サクラ 多摩森林科学園（東京都八王子市）にて 編集部（当時）撮影（保存ポジから）

丹沢大山自然再生委員会の活動

—市民参加から協働へ—

丹沢大山自然再生委員会 委員長
 [自宅] 〒248-0033 鎌倉市腰越5-9-46
 Tel & Fax
 E-mail : ykonohira@yahoo.co.jp

森林計画学を信州大学、東京農工大学、日本大学で教える。その間、ニュージーランド森林研究所研究員、ワシントン大学、メルボルン大学訪問教授、国内では林政審議会会長、日本林学会会長を務める。著書に「森林科学」、「流域環境の保全」、「森林GIS入門」など。日本農学賞、日本林学会賞、林業技術奨励賞を受賞。京都大学卒業、農学博士（名古屋大学）。現在は神奈川県森林審議会会長など地域で活動。国有林の森林調査からの現場叩き上げ技術者（のつもり）。



このひら ゆう きち
木平勇吉

行政が行う事業を市民が反対するのが自然保護運動であったことは古い記憶になってしまった。今は市民参加と合意形成を標榜する行政の仕事と話し合いを重視するボランティア団体の活動が盛んになり社会に定着してきた。さらに協働という概念が広がっている。官と民がどのように協力して自然環境を守るかについて、丹沢大山自然再生委員会での活動体験を通して述べてみる。

これまで私は市民活動による環境保全に関心はあったが、傍観者として論評する立場にとどまっていた。現在は活動現場の真ん中にあって、さまざまな意見の人々と一緒に日々の課題に直面して、理屈ではなく手足を使いどうすべきかに取り組んでいる。実践での戸惑いと期待の中から「市民参加から協働へ」の考え方を整理してみたい。

舞台は神奈川県の10万haを超える丹沢山地であり、そこでは二人の“主演”が登場して話が展開する。一人は神奈川県であり、もう一人は丹沢大山自然再生委員会である。話の前半は事実であるが、後半は私の意見であり希望でもある。

●荒れていく丹沢の自然環境

横浜から見えるほど近くにありながら、丹沢は険しい山々を渓流が深く刻み、野生の動物・植物が豊かである。日帰りができるが、かなり強い脚力がいる。里山散策からクサリ場のある登山、シカや野鳥に四季の花と素朴な温泉や史跡も多い。人の手の入らない自然

►写真① 過密になり飢えたニホンシカ

もともとの棲みかであった山ろくが住宅地になり山へ追われた。植林地に下草が豊かだった時代が終わるとササなどを求めて尾根へ移る。個体数が増えて草やかん木を食べ尽くすと飢餓状態に陥り樹皮も食べる。登山路から異様な「緑の草原」が目につくがシカの食べない不嗜好性の植物の集まりである。登山者を和ますかわいいシカの姿からは想像しにくいが、丹沢の生態系は著しくゆがんでいる。



►写真③ 手入れされない人工林と土壌流出

1960年代の拡大造林により植栽された人工林では長らく間伐が行われていない。所有地の境界がわからず誰のものかもわからない。林内は暗く下草やかん木は見えない。土壌が流れ出して溝が深く掘れている。根が浮いていて痛々しく、そして氣味が悪い。土を失った土地は不毛の死の世界であり森は再生できない。

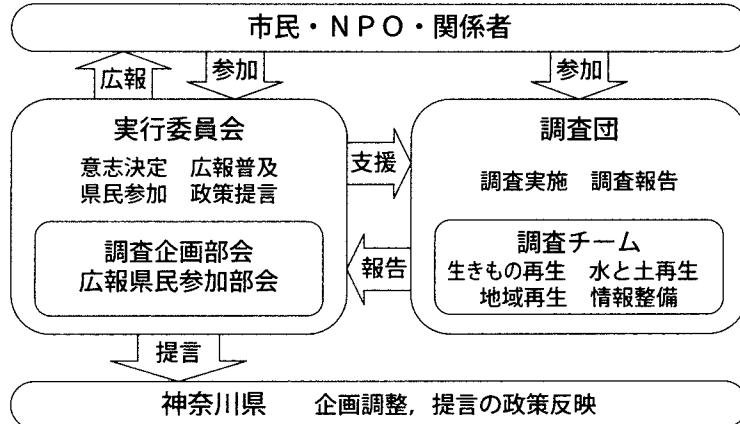
らしい自然が多くの丹沢ファンを呼んでいる。

昔ここを訪れた読者の思い出は「深く、暗く、静かな山」であったと思う。この自然が、今ひどく荒れている。1980年代から生態系の異変が始まり、地域の自然の荒廃は徐々に、しかし、着実に進み、現在はさまざまな現象

が顕在化している。それらはニホンシカの過密化（写真①）、ブナ老木の枯死（写真②）、植林地の手入れ放棄（写真③）、渓流生態系の荒廃、希少種の絶滅、外来種の増加、登山客のオーバーユース、地域社会の低迷、の八つに端的に現れている。その原因には人間社会の変化と深いかかわりがある。1950年代の燃料革命、1960年代の高度経済成長と拡大造林、1970年代の山ろく周辺の都市化と農山村人口の流出、大気汚染、1980年代以降の森林管理の放棄、水源林施設や登山ブームなどである。隣接する東京・横浜の大きな都市社会の負の影響を強く受けている。

自然再生活動の舞台となる丹沢は二つの社会的な問題を抱えている。一つは利害関係者の多くが都市住民であり、意識の上では関心が高いが日常の暮らしには遠い存在であることだ。守るべき大切な自然環境として県民900万人の気持ちは一致している。行政もNPOも地元住民も共通する意識を持っている。しかし、切実感に欠ける。なくてはな





◀図① 総合調査の実行委員会の構成
実行委員会は調査を設計し、広報と県民参加を進める中核機関である。委員はNPOから9名、マスコミ4、企業4、関係団体7、研究者7、神奈川県6、国3で構成されている。調査の実施、解析、報告は調査団で主に研究者である。企画と財政を含めて事務局は県が担当した。

らないが気づきにくい社会的共通資本としての性格が強い。社会的共通資本とは、人間が人間らしく生きていくために必要なものであり大気や森林などの自然資本、道路や水道などの社会資本、そして教育や医療などの制度であり、すべての人が利用できなければならぬ。もう一つの問題は、小規模な私有林が多く、30年生前後の立木が育ち将来は販売できるかもしれない植林地が多いことである。農林業を生業とした過去を引きずりながら、今は山の手入れが放棄され、所有地の境界がわからないという現実がある。森林に期待する役割と社会体制の変化の中で、誰がどのようにしてこの自然再生の課題を担うかが端的に問われている場所である。

●丹沢再生のための総合調査—成功した市民参加事業

このような丹沢の荒廃に対応するために2004年～2005年の2年間に地域の社会問題と自然環境の問題を含めた総合調査を神奈川県が企画した。県民参加を標榜して、県民で構成される「実行委員会」によって調査が進められた。調査項目は生き物、水と土、地域再生、情報整備に大別されて、さらに32の小項目に細分された。参加者は500名を超える大規模なものとなった。この調査の成果は学術報告となり、さらに、これからの再生事業のシナリオとして県知事に提案され、2007年から始まった神奈川県丹沢自然再生計画として実を結んだ。実行委員会の組織と運営の仕組みを図①に示す。

実行委員会には企画部会と広報部会とが設けられて調査の筋書きを作り県民へのPRを進めた。調査を実施するのは調査団であり、委員会運営や調査を支援するのは事務局である。事務局は神奈川県職員が担当したが、それ以外は県庁外のNPO、企業、マスコミ、市町村、関連団体からの代表者、林家、研究者などであった。公募により参加したNPOの自主調査も行われた。専門的な調査は県試験研究機関、博物館、コンサルタント、大学の研究者が担当した。テーマによっては県と専門組織の間で委託契約が結ばれた。調査項目も調査員も多いことはすでに述べたが、華やかなパンフレット、のぼり旗、ポスター、新聞の連載記事、講演会などの県民へのPR活動が広く繰り広げられた。データベース「e-tanzawa」や「アトラス丹沢」は内容が豊富で美しく楽しい地図であり、また、古い資料も収集され展覧会として公開された。この実行委員会の活動を支えたのは事務局役の神奈川県緑政課と自然環境保全センターである。保全センターとは研究と普及、自然公園と県有林の管理などを担う県の技術者集団であり、行政の企画と現場の調査とを調整して県民参加の成果を上げるのに大きな役割を果たした。この調査は行政が発案し県民が参

加して素晴らしい結果を得た市民参加の優れたモデルであるといえる。

さて、この実行委員会方式による調査の功罪を市民参加の視点でまとめてみる。調査の役割を一般化して要約すると、①企画は行政、②運営は市民、③調査は市民、④結果の分析・報告は市民、⑤事務局・予算は行政となる。これはトップダウン型市民参加あるいはプログラム化された市民参加といえる。この体制の特徴は企画者により目的が設定され、仕事の全体がいくつかの部分に分割されて、その部分の担当者の責任が明確なことである。部分を担当する市民はやるべき仕事の目標、期日、予算が与えられ、その範囲内で思い切り活躍し責任を果たすことができる。与えられる範囲では自主性が保証され、さらにほかの部分との調整・合意の手続きやロジスティック（後方支援）の煩わしさから解放される。企画者は全体を体系的にきっちり分割することと後方支援を果たすことにより目的を達成できる。さらに両者には調査実践を通して仲間意識が芽生え、信頼感が育つ。室内での議論では得られない良い点である。

丹沢の場合は神奈川県の優れた企画力と労を厭わないロジスティック、そして多くの県民の積極的な参加と両者の間に生まれた信頼関係に支えられた県民参加事業であったといえる。

一方、このトップダウン型で、プログラム化された市民参加事業には大きな欠点が潜む。市民は「お釈迦様の手のひらの上で暴れまわる孫悟空」に陥りやすいからである。疑問や批判の心を失う。内発的なきっかけではないから熱意が続かない。手段の目的化が起こる。長い時間で見ると市民活動の進展は停滞すると思う。与えられる企画を待ち、後方支援を待ち、居心地の良さに任せて自立しなくなるからである。市民参加の次の段階である協働へのブレークスルー（飛躍）が起こらないからである。

行政にとっては堅実で進んだ方法ではあるが、せっかくの努力にもかかわらず陳腐な成績に終わりかねない。市民参加が潜在的に持つ大きなメリットを十分に生かしきれないからである。行政にとって市民参加とは何か、形だけではなく、どのような意義を見いだすかを考えなければならない。

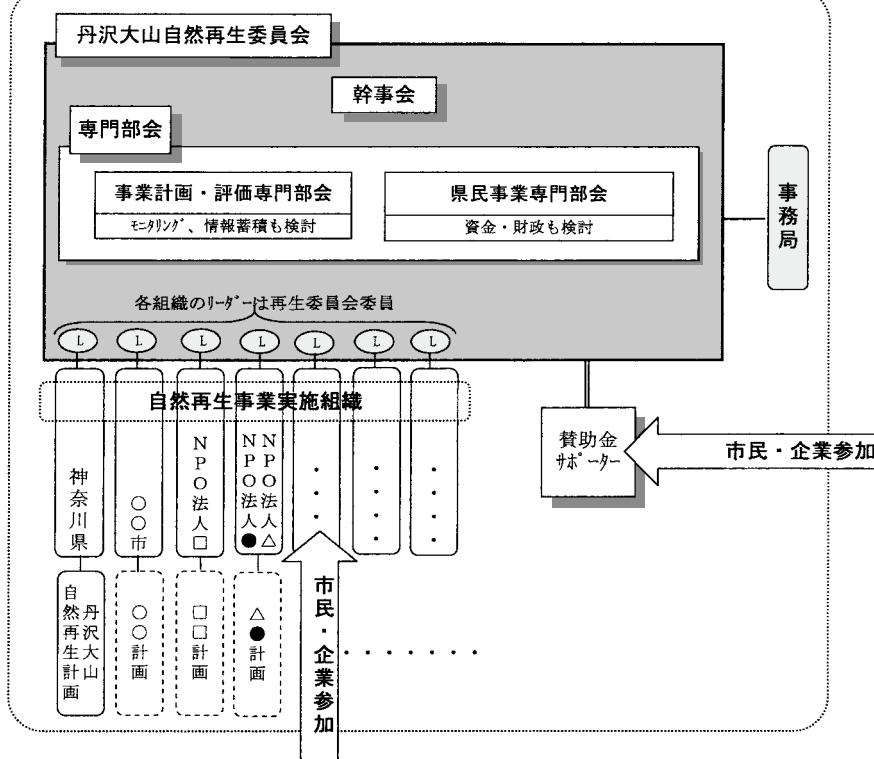
●自然再生委員会の設立—新しい官民協働の組織

総合調査の成果は神奈川県の再生事業に引き継がれた。そこで大きな特徴は自然再生委員会の設立である。趣旨は「国、県、市町村、民間団体、企業、県民が参加し、自然環境の保全と再生の全体構想を策定し、専門的に問題を検討し、モニタリングや解析を行う。県民の参加を促し、普及啓発し、企業、NPOからの資金調達、広範な参加型管理、順応型管理、統合的・流域一貫の管理を推進する」と文章化された。しかし、運営の実際の方法は新たな再生委員に委ねられた。

委員会のこの理念は自然再生推進法（2002年）に沿ったものである。この法律は協働時代の幕明けといわれ、市民と行政が対等な立場で参加し、円卓の場で自然再生の全体構想を作ることと、地域住民やNPO・市民を事業の担い手と考えた最初のものである。釧路や知床など全国で試行の段階である。しかし、私たちは手探りでも自分自身で考え、地域の実情に合わせて作ることにした。今は法律に基づく組織ではない。

委員会の構成をスケッチしてみる。委員は全体で43名で学識者、NPO、マスコミ、企業、関係団体、行政（国、県、市町村）の代表者である。内部組織として幹事会、計画・評価

丹沢大山の自然再生



名称	内容	構成員
再生委員会	丹沢大山地域の自然再生を推進するため、必要となる事項の協議を行うとともに、普及啓発事業や県民参加事業などの必要な事業を実施する。	行政、N P O 法人、各種団体の代表者、学識者、企業、マスコミ、利害関係者
幹事会	委員会の運営に関する計画を立案するとともに、各専門部会などの下部組織間の連絡調整を行う。	委員長、副委員長、専門部会の副会長、事業実施組織のリーダー
専門部会	事業実施組織とは独立し、自然再生事業全体に係わる事項の審議、検討を行う。 事業計画・評価専門部会は、全体構想の策定、再生事業の評価、モニタリング設計、情報蓄積も検討する。県民事業専門部会は、広報、県民協働事業、再生事業実施、財政、その他再生委員会への参加促進策について検討する。	専門的知識から、自然再生事業を評価できる者。 もしくは、自然再生事業の実行者、広報、県民活動支援ができるもの。 (学識経験者、マスコミ、NPO法人等)
自然再生事業実施組織	再生事業の実行者。	行政、N P O 法人、各種団体の代表者。
事務局	委員会及び各下部組織の事務を円滑に実施するための庶務的な事務を行う。	委員会が雇用する職員
サポーター	数万人を単位とした、支援団体。県民事業専門部会が制度を検討、運営する。	企業、団体、一般県民(個人)

※再生委員会の委員は、専門部会に属するか、自ら自然再生事業の実行者となる必要がある。

▲図② 自然再生委員会の構成

委員は学識者 9、NPO10、マスコミ 4、企業 3、関係団体 7、行政(国、県、市町村) 10 の 43 名である。

専門部会、県民事業専門部会、事務局がある(図②)。

計画・評価部会は事業の計画と実際の進み具合を見て、必要なら計画内容を修正する順応的管理を進めるエンジンである。県民部会はPRして県民の参加意識を高めるエンジンであり、さらに会員のNPO活動を支援したり独自の企画を進める所である。このように委員会の目的、組織、会員、運営規定などの形は整っている。財政は企業協賛金、会費、助成金を含めての基盤づくりの最中であり、大きな課題となっている。事務局は暫定的に

は県が担っているが、ささやかな独自のものを立ち上げたところである。委員会は2006年の秋に発足し、それまでの総合調査の実行委員会のメンバーが横滑りして1年がたつた。この横滑りは新しい委員会の苦難の道の始まりである。協働への理念は高く夢は大きいが、現場での実践はこれからである。

●再生委員会の性格—市民参加と協働についての私見

自然環境問題への市民参加の歴史は日本では30年になるが、内容により四つの段階に分けられる。

- (1) 作業参加：行政などが準備した保全活動である植林や保育作業に市民が参加する。
- (2) 計画参加：開発や保護の計画段階で市民が意見を述べ理解を深めて合意を導く。
- (3) 決定参加：代替案の中から最終案を決定する場面に市民が参加する。
- (4) 実行参加：保護や修復などの事業を主体的に行う。

作業参加は最初にあり、最も参加しやすく、最も責任は軽い。最も楽しいが、しかし、最も重要な段階である。現地での作業体験は森や川の実態を知ることができるからで本や室内学習より、はるかに楽しい。現在はこの段階の参加が多い。これに対して計画参加には参加する側にも参加を受け入れる側にもかなりの準備が必要であり抵抗感がある。参加するには問題の理解、意見、そして協調のための実力が必要となる。受け入れる側には説明する能力、高い専門知識、先を予知する能力が求められる。さらに同じ立場で話し合える「寛容」な気持ちになる自覚が必要である。特に行政担当者にとっては発想の転換が求められる。しかし、長い間に生じた権限やテリトリーの意識を払拭することは容易ではないであろう。

決定や実行への参加は協働といえる。対等で自立した立場での協力である。上下ではなく横並びの関係である。協働とは既存の行政組織では果たせない役割を補完する活動である。他者が持たない能力を備え、しかも、目的を共有し、結果に責任を持つことである。

さて、この再生委員会には作業参加や計画参加の役割もあるが、基本的な性格は決定と実行に参加する協働の役割を持つ自立した組織であると考えている。行政の計画づくりや実行結果のモニタリングは行政の仕事の下請けとしての分担ではなく、独自の判断でもって進める再生事業そのものである。自立性があることにより存在価値が社会で認知される。官庁のパラサイト的な団体では将来は暗い。

●再生委員会の現状—委員長の反省

さて、発足して1年目の時点で委員会について次のことを振り返ってみる。

- (1) 会員がこの委員会の性格をどのように考えているか。
- (2) 再生事業の実行主体としての運営能力が備わっているか、特に財政や事務局など組織の基盤をどのように作るか。
- (3) 生みの親である神奈川県と委員会との将来の関係はどうあるべきか。

現在の委員は、すでに述べたが神奈川県が行った調査の実行委員会からの横滑りであり、新しい再生委員会の性格を十分には理解しないままの惰性的な参加という面がある。確かに丹沢の調査と再生事業とは直結しているが、前者は県が企画した事業への参加であり、後者は自立した新しい役割を自分で作る組織である。性格の全く異なる委員会であると気

づかずには進むと、「そんなつもりではなかった」との気持ちが出てきて議論は冷めてしまう。他人が作った組織であればその内容を見て参加するか否かを決めればよい。しかし、自分で作る組織は参加してから後に内容を議論することになる。再生委員会は新しく生まれた組織であるから今後の内部での議論と合意と説明が欠かせない。プログラム化された参加の欠点を先に述べたが、与えられる課題と支えられる態勢に慣れすぎて縦型社会での生き方が上手になり、横型社会での生き方には慣れていらない私自身の弱みを感じている。

実行主体としての委員会の運営能力については、NPO や法人からの代表者と学識者で構成されるので議論は活発であっても散漫になり収斂しない。審議の機関となりがちである。議論の素材となる原案の企画力が弱く、議論の結果を取りまとめる集約力が弱い。新しい創意と素早い決断が求められる市民組織の良さが發揮できない。会議が多くなりがちで出席者に徒労感がたまる。やる気は萎える。今は運営能力を高める工夫が必要であり、これを乗り越えている先輩の市民活動から学ばなければならぬ。資金獲得には日々の努力が基本であり、人頼みの補助金・助成金だけによる市民活動は伸びないと思う。官庁の委託事業を財源にする場合もあるが限度がある。事務局を持ち、優れた事務局員を育て、運営能力を高めることは絶対に必要である。活動についての意思決定では現場の担当者を中心としたボトムアップの流れと自主性が大切である。

神奈川県と再生委員会との関係については先に述べたが、委員会の委員と県職員は総合調査と再生計画と一緒に取り組んだ仲間であり、丹沢再生への共通の思いと信頼感がある。そして双方にとって将来とも再生事業を進めるのに重要なパートナーであり、そうあってほしいと期待している。しかし、委員会の仕事は県職員の仕事ではない。県職員の行政の仕事は委員会の仕事ではない。協力には限界があり、信頼は続くとはかぎらない。協働が実質化することにより、そして双方にとって役に立つ組織であることにより、絆は強まるであろう。

●協働への期待

行政と市民の協働とはどのようなものなのかを、私はいつもイメージとして描いている。私が期待する姿の輪郭を箇条的に挙げてみる。

- (1) 協働する組織にはどちらにも「実力」がある。特に、一方が持っていない能力があり、互いを補完できる力がある。
- (2) 両者の間には信頼感がある。気分だけではなく組織の運営や問題解決の能力について信頼できる。
- (3) 必要なとき、あるいは求められた場合に、互いに協力して一緒に、自立的に仕事に取り組む。
- (4) そこでは共通の目的意識を持ち、仕事を協力して行うことの意味を理解している。
- (5) 仕事の結果に互いに責任を持ち続けて、社会への責任を分かち合う。
- (6) 公開された場で仕事を進める。

行政と市民との協働の事例を述べるつもりで書き始めたが、その目的は達せなかった。それは、私には実際に協働と呼べるだけの実績がないからである。丹沢大山自然再生委員会がこれから実際に活動して実績を積み、神奈川らしい方法で協働とは何かを具体的に説明できるようになりたいと願っている。

[完]

わが校森林・環境コース紹介

—群馬県立農林大学校

石田敏之

群馬県立農林大学校 農林部 農林業ビジネス学科 森林・環境コース
 〒370-3105 群馬県高崎市箕郷町西明屋 1005 番地
 Tel 027-371-3244 Fax 027-371-6968
 E-mail : isida-ty@pref.gunma.jp



●沿革

(1) 学校の歴史

群馬県には農業関係指導者養成を目的とした「農業大学校」(昭和44年創立)と、農業自営者養成を目的とした「農業経営大学校」(昭和49年創立)の2校があり、長い伝統を受け継いで多くの卒業生を輩出してきました。昭和58年4月、新しい時代の実践者養成機関として、この2校に林業部門を加え、「群馬県立農林大学校」が発足し、林業部門は「林学科」としてスタートしました。

(2) 森林・環境コースに至るまで

林学科は、当初農林学部の中に「園芸学科」「畜産学科」「農産学科」とともに設置され、林業後継者の育成や本県特産の生シイタケ栽培技術に力を入れてきました。平成15年4月、従来の林業教育に加え、森林の持つ多面的機能に関する教育を充実させるため、林学科を「森林学科」に変更、さらに平成19年度から、森林、環境を中心とした環境教育にまで幅を広げ「森林・環境コース」に改編しました。現在、本コースは、農林関係の企業・団体への就職に対応した教育を主体とする「農林業ビジネス学科」の中に設置されています(写真①、②)。



▲写真① 学生寮(手前)と教育棟



▲写真② 森林・環境コース実習風景

●森林・環境コースの現況

(1) 定員

現在、森林・環境コースの定員は20名。毎年十数人の入校生を受け入れているところです。平成19年度は男子11名、女子4名、計15名が入校しました。

(2) カリキュラム

ア) 講義科目

授業は1日4時限で行われ、基本的には午前中は講義を、午後は実習を行います。

講義は、①教養科目、②共通専門科目、③コース専門科目に3区分され、コース専門科目は全科目必履修です。本校は「樹木医補養成認定機関」に認定されており、関係する「樹木医学」を、専門の外来講師により講義しています。平成19年度からは「森林情報士」の資格取得に対応し、森林GISソフトを用いた「森林空間情報学」を開講、平成20年度からは次代の環境政策に対応した「環境社会学」、森林の新たな活用方法として期待される健康への効用を解説する「フォレストセラピー論」をそれぞれ開講します。「木材流通加工概論」では教育の現場を校外に移し、育林の現場から、素材市場、製材、住宅産業まで木材の流れを学習しています。

イ) 実習科目

実習は、20科目開講され、すべて必履修となっています。このうち校外学習は、県西部の富岡市と下仁田町にまたがる「大桁県有林」を拠点に行う「造林学実習（植栽）」を皮切りに、群馬の代表的な自然である「尾瀬」「赤城山」「上州武尊山」「谷川岳」の森林調査、林野庁森林技術総合研修所林業機械化センター、県環境森林部の協力による高性能林業機械の操作、森林防災学実習では治山工事現場の見学や渓流調査、本県特産の生しいたけ栽培など、森林にかかわる幅広い分野の実習を行っています（写真③、④）。

（3）指導方針

本校は、農林業技術の理論と実践を有機的に結びつけた教育を実践しており、加えて社会人として必要な協調性と積極性を備えた人格形成に取り組んでいます。



▲写真③ 校外実習（尾瀬ヶ原）



▲写真④ 林業機械実習

1年生は全員全寮制とし、規則正しい生活と、責任感のある行動が取れるよう指導しています。特に本コースにおいては、チェンソーや刈払い機、ナタなど危険な器具を使用することや、2カ年で森林に関する一通りの作業ができるよう指導しており、したがって用具の手入れ、安全確認はもとより、規律ある行動が取れるよう日々注意を払っています。

●学生の気質

(1) 入校動機

本コースに入る学生の動機は多様ですが、平成19年度新入生へのアンケートによると、関東で森林を学べる唯一の短期大学（相当）であることや、樹木医補の認定が受けられる等が主な動機として見えてきます。農林家の子息はほとんどいませんが、広い視点で見れば彼らも「森林を守る後継者」と言えましょう。入校後の面談や会話の中で、森林に皆関心があることは十分伝わってきますが、森林に対するイメージが先行している場合が多く、彼らの気持ちを尊重しつつ、森林・環境の現状を教えることの難しさを感じことがあります。

(2) 学園生活

学生の心情やクラスの雰囲気は、学年により違います。また、それ以上に同じ人間が日々変化があるものの、学園生活を重ねるにつれて大きく成長していくことに驚かされます。本校学生は、全般に社交的で、人前に出ることも臆せず、素直に感情表現ができる学生が多く見受けられます。体力的にも恵まれた者が多く、5月に本校で開催される登山マラソン「榛名登山大会」では、毎年上位に数名入賞し、皆体力のあるところを見せてくれます（写真⑤）。

課外生活を見ると、前述したように、1年生は全員寮生活を送っています。窮屈な生活だらうと想像してしまいかですが、大多数は寮生活に順応し、原則的に通学となる2年生になっても在寮を希望する学生がほとんどです（写真⑥）。

(3) 進路希望・進路実績

入校した時点で、ほとんどの学生が森林関係の企業、団体、公務員などの業種を希望します。職種は単に「森林現場の作業をやりたい」とか「林業技術職」等おおざっぱなものでしかありません。1年生で実習を重ね、2年生にかけて職業



▲写真⑤ 榛名登山大会



▲写真⑥ 榛の木祭寮行事風景

▼表① 最近 5 力年の進路状況（森林学科、人）

区分＼卒業年度	H15	H16	H17	H18	H19
森林組合	4			3	2
林業関係（民間）	2	3	4	4	3
農業関係（民間）	1		3	1	
その他（民間）		5	2		
国家公務員			1	1	4
その他公務員	1				
進学・その他	1		2	1	
卒業生計	9	8	12	10	9

体験の「先進農林家等体験学習」に出向くと、森林分野の職業が形となって見え始め、公務員を目指す者は日々受験対策に励むなど、将来の方向に関して心の整理が進んでいきます。

最近 5 力年の進路状況を表①にまとめてみました。

卒業生のおおよそ 2/3 は林業関係に就職し、ほかの者も農業関係に多く就職しています（表①）。

●地域の中の農林大学校

（1）卒業生の活躍

本コースの前身である林学科、森林学科の卒業生は、今春卒業生を含め 286 人になります。林業関係の自営は 6 人と少数ですが、これまでの卒業生の半数以上が、森林組合や木材・きのこ・林業機械などの企業、国・地方公務員等森林・林業の各分野で活躍しています。第 1 期生は 40 歳代になり、県内の森林・林業の現場で中核的な役割を担っており、新卒者は未来を担う新戦力として期待されています。卒業生からは、在学生の授業や校外学習、就職活動等に多大な協力を得ています（写真⑦）。

（2）これからの学生の育て方

本コースの教育には、前にも述べたとおり県内森林・林業分野の多くの方々から協力を得ており、学生を地域全体で育てていると言えます。2 力年という限られた期間内でのカリキュラムのため、短期に習得すべき内容が多く、授業は一方の講義・実習になります。本校には積極性のある個性的な素質を持った者が多く入校してきますので、今後は学生が“意識”を持ち、地域の活動にも積極的に参加する姿を求めていきたいと考えています。その牽引力となるのが「課題研究」です。本校は、プロジェクト学習



▲写真⑦ 林木育種場での校外実習



▲写真⑧ プロジェクト発表大会



▲写真⑨ 平成 20 年 3 月卒業式にて

発表の「関東ブロック大会」で毎年のように優秀な成績を収め、全国大会出場を果たしています。森林学科の学生も平成 18 年度には全国大会に出場しました。「課題研究」では、各学生の課題への取組みにおいて、地域の森林・林業の課題を林業試験場などと協力しながら、学生自ら成果を地域へ波及させるよう指導していく必要があります。本県の森林を守り育てるため、将来を担う学生を教育し、地域に貢献することが私たちの使命と考えます。人々の森林への関心が高まりつつある中、森林に関心ある若者に学習の場を与える、県内に広く活躍の場を提供することの大切さを実感している昨今です（写真⑧、⑨）。

（いしだ としゆき）

群馬県立農林大学校までの交通

*群馬バス箕郷営業所下車、徒歩 2.7km（タクシー約 5 分）…JR 高崎駅からの場合：西口 2 番のりばから箕郷行きに乗車、約 35 分、JR 前橋駅からの場合：北口 5 番のりばから箕郷行きに乗車、約 40 分。

*ホームページ URL：<http://www.gunma-iaf.ac.jp/>

森林・林業関係行事

5月					
行事名	開催日・期間	会場	主催団体	連絡先	行事内容等
第50回全日本こけしコンクール	5/3～5	白石市文化体育活動センター（宮城県）	宮城県	仙台市青葉区本町 3-8-1 Tel 022-211-2723	古来より人類共通の財産である木にこだわり、そして木は地球の温もりを伝えるものとし、この温もりを玩具や応用木製品で未だまでの財産として表現している全国のこけし等を広く紹介宣伝し、こけし美の鑑賞とその認識をさらに深めるとともに、工芸品としての優れた品質意匠及び技術の向上及び地場産品の育成を図り、観光工芸産業の振興発展に寄与する。
			白石市役所	白石市大手町 1-1 Tel 0224-22-1321	
			白石市商工会議所	白石市字本鍛冶小路 13 Tel 0224-26-2191	

明日の地域林業の担い手を養成

—静岡県立農林大学校 林業分校

伏見裕之

静岡県立農林大学校 林業分校 主幹
〒 434-0015 静岡県浜松市浜北区於呂 4034-5
Tel & Fax 053-583-3523



●沿革

静岡県立農林大学校林業分校（以下「分校」という。）は、1970（昭和45）年に創設された林業講習所をルーツとします。財団法人金原治山治水財団に施設の建設費をご寄付いたただくなど、地元の林業・木材業界のご支援と期待のもと、創設されました。

施設全体は明善会館と称し、寮は、金原明善翁の信条である

- 実を先にして 名を後にす
- 行を先にして 言を後にす
- 事業を重んじて 身を軽くす

より「実先寮」と名づけられています。講堂には大断面集成材を用いるなど、当時としては斬新な設計でした。メンテナンス予算の確保に苦心しつつ、38年の歴史を刻む施設を現在も活用しています（写真①）。

ちなみに、金原明善翁は、明治・大正にわたって活躍した事業家で、天竜川の治水や、天竜川流域への植林など、社会公共事業に尽力されました。樹齢100年を超す金原山林は財団に引き継がれ、今も木材生産はもとより、さまざまな恩恵を流域住民にもたらし続けています。



▲写真① 明善会館全景



▲写真②、③ ともに林業講習所当時のポスター

林業講習所は、その後、1974（昭和49）年に林業短期大学校、1980（昭和55）年に農林短期大学校林業分校、1999（平成11）年に農林大学校林業分校と改称し現在に至っています。

●設置目的・教育目標

静岡県立農林大学校は、優れた農林業後継者、農山村地域の振興に貢献する指導者その他の農林業を担うべき者を養成するため設置されています。

本校の校訓である『耕土耕心』は、「額に汗し、母なる大地を耕すことにより、自己を知り、自我に目覚め、自らの心を生成させて、立派な人間性を作り上げていく」という意味です。

また、教育目標は次のとおりです。

- (1) 産業人としての自覚を高揚させ、農林業に取り組む自信と誇りを持たせる。
- (2) 近代的な農林業経営を推進するために必要な技術力を養う。
- (3) たくましい体力と精神力を養い、心豊かな人間形成を図る。
- (4) 共同生活を通じて、自己の確立と協調性を養い、リーダーとしての指導力を身につける。
- (5) 幅広い視野を持ち、社会の変化に対応できる経営能力を養う。

ちなみに林業講習所創設当時の入所案内を見ると、「林家の子弟や森林組合など林業に従事することを希望する青年達に、林業についての知識と技術を修得させ、明日の地域林業の担い手となる林業人の養成」を目的として掲げておりました。研修生募集ポスター（写真②、③）からも見て取れるとおり、当時は木材生産を大命題に国策として人工造林に邁進していました。時代は、林業から森林、さらには環境へと情勢が大きく変わってきているところですが、「林業」に主軸を置き、目標達成に向けて励んでいます。

▼表① 静岡県立農林大学校の教育課程

部	学科・専攻	コース	1学年定員	総定員	修業年限	出願資格 (見込を含む)
養成部	園芸学科	野菜 花卉	40	80	2年	高校卒
	茶葉学科		20	40		
	果樹学科		10	20		
	畜産学科	大家畜 中小家畜	10	20		
	林業学科		10	20		
研究部	総合技術専攻	農業 林業	20	40	2年	農業大学校、 短大、大学卒
	専門技術専攻		10	20		
研修部	実践技術経営専攻		若干名	若干名	1～2年	高校卒

●教育課程及び教育内容

大学校の教育課程（表①）のうち、林業関係は、高卒者を対象とした2年課程の養成部林業学科がメインとなっています。その教育内容は、表②のとおりです。

1年次は、他学科とともに全寮制の本校（磐田市）において、林業に関する基礎的知識を学ぶと同時に、林業機械・器具の取扱いや、シイタケ・ヒラタケ・山菜の栽培、苗木の育成、測量などの実習を通じて、基礎的な技術を習得します。

2年次は、静岡県農林技術研究所 森林・林業研究センター（浜松市浜北区）に隣接した分校（明善会館）で学びます。現場での実習を主体に、センター研究員の指導による専門的な学習や卒業論文の作成を行います。また、卒業後は即戦力となるよう、林業架線作業主任者免許取得資格・チェンソー作業従事者・刈払機取扱作業安全衛生教育・大型特殊自動車運転免許・小型車両系建設機械・フォークリフトなどの資格取得に努めています。さらに先進経営研修では、2か月にわたり、県内の林家や林業・木材業事業体の現場に学生が入り、経験を積むこととしています。

本校には、短期大学卒業者を対象とした2年課程の研究部が併設されており、研究部卒業生は、人事院規則で4年制大学卒業相当として扱われます。近年、関心が高まりつつある樹木医療や森林情報士の資格が取れるため、本大学校養成部からの進学者のほか、4年制大学の卒業者も入学しています。

なお、2003（平成15）年からは、オランダ最大の農業専門学校であるウェラントカレッジと本校の交流を行っており、春にオランダから学生が来校、秋には本校学生のうち希望者がオランダを訪問し、親交を深めています。

●実習用架線集材装置

分校には、林業講習所の時代に設置された実習用の架線集材装置がありましたが、老朽化により、近年は使用不能の状態となっていました。

そんな折、元県農林水産部長の栗田憲二氏より「林業後継者育成のための施設を寄付したい」旨の申し出がありました。検討の結果、架線集材装置を寄贈していただくことになり、2007（平成19）年4月10日、落成式を行いました。

▼表② 養成部林業学科の教育内容

科目	教科	単位数	備考
教養科目	経済学	1	
	法学	1	
	体育	1	
	選択心理学		
	自然科学	1	
	I 社会学		
	II 基礎英語	1	
	英会話		
	農林業経営	1	
	作物	1	
1年（本校）	農林業政策	1	
	マーケティング論	0.5	
	農林業時事	1	
	特別講義	0.5	
	農林業汎論	2	
	情報処理 I	1	
	情報処理 II	1	
	簿記会計		
	経営分析		
	育種		
専門科目	農業気象		
	環境科学		
	中東地域論 A		
	データベース概論		
	情報処理演習		
	農畜産物加工		
	フラワーデザイン		
	選択食と文化		
	造園		
	中東地域論 B		
2年（林業分校）	データベース演習		
	測樹	2	
	森林施業計画	2	
	造林 I	3	
	専用林産	3	
	林業機械	3	
	森林土木	5	
	林業概論	1	
	林業経営論	2	
	造林 II	2	
専攻科目 II	森林保護論	1	
	食用菌類論	2	
	環境绿化論	2	
	伐木集運材工学	4.5	
	林道設計法	1.5	
	木材利用論	2	
	経営特論	2	
	林業特論	2	
	大型機械	2	
	先進経営研修	10	
卒業論文		3	
計		71	
インターンシップ		2	追加単位科目
海外農業事情		2	

訓してきた学生 7 名による実演を行い、関係者全員で遺志を継いで、施設の有効活用と林業振興のために努力することを誓いました。

今後は、学生の実習（写真④）はもとより、林業専門技術者養成研修など、関係業界や団体の皆様方による技術訓練の装置としても大いに活用していただくことを期待している



▲写真④ 実習用架線集材装置

栗田氏は、1949（昭和 24）年に静岡県職員として林業指導所に奉職、以来、林業一筋に活躍され、林務部長及び農林水産部長の要職を歴任されました。この間、林業普及制度の強化、シイタケ栽培の高度化、林業後継者の養成など多大な功績を残され、特に、林業講習所の創設には、担当部長としてご尽力いただきました。

なお、栗田さんは、2007年2月21日、施設の完成を見ることなくご逝去され、残念でなりません。

落成式では、関係者列席の中、分校で学ぶ2年生代表からお礼の言葉を述べたあと、この日のために、連日、集材機の操作練習を特

▼表③ 卒業後の進路 (H 10～H 19 年度)

(単位:人)

年度	H10	H11	H12	H13	H14	H15	H16	H17	H18	H19	計	
就職	森林組合・農協	1	2			2	1	1	1	2	1	11
	公務員		1	1	1			2	3	1	1	10
	自営			3		1			1	1		6
	林業団体		1	1	1	1						4
	会社			1	2	2	1	1		2		9
	林業・木材業		2	1				1	2		1	7
	一般	1	1	1								3
	造園		3	1	2	1	2					9
	その他											
進学	本校研究部	1	2	2	2		2	2	2		1	14
	その他				1		2	1			1	5
	海外研修	1							2			3
	計	9	9	11	8	8	6	8	11	4	7	81

ところです。エンドレスタイラー式及びダブルエンドレス式を実習できる架線集材装置は希少とのことで、全国からも問い合わせを受けています。

●進路状況

林業講習所時代から現在に至るまで、448名の卒業生を送り出しています。最近10年間の進路状況は、表③のとおりです。かつては林家の子弟が多かったため、必然的に自営が多かったのですが、森林の大切さが理解されるにつれ、現在では一般家庭からの入学者が大半となり、進路も、森林組合・国家公務員・林材業関係会社などが多くなっています。

●おわりに

林業・木材業界をはじめとする地域の皆様には、施設の建設や、講義及び研修の実施などで全面的なご支援・ご協力をいただいていることを、日々、学生ともども実感し、感謝しております。

少子化や大学全入時代を迎えるにあたり、入学者の確保が課題となっていますが、何よりも、森林・林業の現場でOBが活躍することが当大学校の存在意義を高めることになると考え、これからも林業教育に励んでまいります。

世界的に森林の重要性が見直されつつある今日、林業の技術を身につけることは、人生にとって大きな武器となります。意欲ある若人の入学を職員一同お待ちしております。

(ふしみ ひろゆき)

静岡県立農林大学校林業分校までの交通

*遠州鉄道西鹿島線または天竜浜名湖鉄道の西鹿島駅下車、徒歩約15分。

*静岡県農林技術研究所森林・林業研究センターに隣接。

自然のなかに 心のなかに 森林を育てる

—長野県林業大学校

武田雅宏

参事兼長野県林業大学校教授
〒397-0002 長野県木曽郡木曽町新開 4385-1
Tel 0264-23-2321 Fax 0264-21-1058
E-mail : takeda-masahiro-g@pref.nagano.jp



●概要

長野県林業大学校は、「自然のなかに 心のなかに 森林（もり）を育てる」をモットーに、実践的な教育を重点にした森林・林業の技術者を養成する修学年数2年、定員は1学年20名の大学校で、昭和54年4月1日に開校し、今年度、創立30周年を迎えます。

本校は、東に御岳山、西に木曽駒ヶ岳を望む素晴らしい景観に恵まれた、木曽檜で有名な長野県木曽町に位置しています。

学生たちは、この豊かな自然と全寮制に伴う経済的にも恵まれた環境のなかで、森林・林業の専門的知識を学ぶとともに、林業機械を駆使した実習などで即戦力となる優れた知識と技術を身につけます。

本校の特徴は、即戦力につながる実学を重視、4年生大学に比べ有意義な資格取得が多く得られること、全国の同様の短期大学のなかで林野庁、県などへの公務員合格率がトップであること、全寮制であることから生活費も込みで年間の経費が大変安いうえに、さらに有利な貸付金も用意されていること、などです。

森林・林業関係の職業は、近年、地球温暖化を契機とした環境ビジネスにも広がりを見せていましたが、就職など進路指導はスタッフが学生の満足いくまで親身に行うのも、本校の特徴です。

それでは、森林・林業・木材産業の現場の課題に即戦力として対応できる人材を養成するための本校の教育方針・教育課程をご紹介します。

(1) 教育方針

*一般教養を高めるとともに、専門的な知識・技術を体系的に取得させ、さらに寮生活を通じて人間形成を図るなど指導者となるための全人教育を行う。

*大学・試験研究機関との連携のもとに森林・林業に関する技術並びに知識を習得させ、長野県林業の進むべき方向に沿った教育を行う。

*実験・実習を重んじ、実践的な教育を主眼として、新時代の社会の要請に対応し得る生きた教育を行う。



▼表① 教育科目

一般教育科目

科目名		教科	単位
人文科学	哲学・倫理学	哲学	2
	心理学	心理学	2
	文学	文学	2
社会科学	法学	法学	2
	社会学	社会学	2
	経済学	経済学	2
自然科学	数学	数学	2
	物理学	物理学	2
	化学	化学	2
	生物学	生物学	2
	情報処理学	情報処理学	4
外国語	英語	英語	4
保健体育		体育	2
体験研修		彫刻	2
一般教育科目		計	32



専門教育科目

科目名		教科	単位
育林生態	育林学	造林 森林保護	7
	森林生態	樹木医 樹木 森林生態 環境学	9
森林資源管理	林業管理 經營学	測樹 林業經營学 森林計画普及論 森林評価 森林管理学	7
	森林情報学	森林情報論	4
	木材商業論	木材商業論	2
森林土木	森林地質	森林地質	
	治山工学	治山工学	
	林道工学	林道工学	
	造園	造園	
	測量学	測量	3
景観保護	森林風致学	森林風致	2
	保健休養学	救急救命 野外活動	3
森林機械	林業機械 工学	林業機械 林業架線	14 1/2
	木材利用学	木材物理 木材加工	5
林産	特用林産	特用林産	3
	森林政策	林政学 林業概論	4 4

選択科目

育林生態	育林学	造林	1
林産	木材利用学	木材加工 (CAD)	1
森林資源管理	林業管理經營学	測樹	1
森林土木	森林土木工学	治山	1
	測量学	測量	1
体験研修	体験研修	インターンシップ	(4)
専門教育科目		計	79 1/2

(2) 教育課程

本校のカリキュラムは、現場での課題に即戦力として対応できる実践的な専門科目を充実させるとともに、併せて編入試験に対応するため、一般教育科目の充実も図っているのが特長です。平成 20 年度からは、2 年時にコース制を導入し、企業などと連携したインターンシップ研修が行われます。科目名と単位について表①を参照してください。実践的な専門科目の中核をなす実習科目の日数は、年間授業日数 188 日のうち、1 年生が 45 日、2 年生が 79 日となっています（表②）。

▼表② 20年度 年間実習計画

月	教科名	実習内容	学年	月	教科名	実習内容	学年	
4	特用林産	原木しいたけ植菌	1	10	体験研修	町駅伝大会	1・2	
	特別講座	パソコン操作	1		森林計画	指導林家山林研修	2	
	校外研修	屋久島視察	1		森林被害	森林被害状況観察	2	
	資格取得	車両系建設機械	1・2		土木材料	施工現場研修	2	
5	造林	植栽	1		造林・機械	総合実習	2	
	校外研修	県植樹祭参加	1		林道	林道現地測量	2	
6	特別講座	朴葉巻き造り	1		林業架線	架線実習	2	
	森林土壤	土壤調査実習	1		木材加工	炭焼実習	2	
	救急救命	赤十字救命法講習	1・2		樹病	樹病学実習	2	
	治山	治山現場研修	2		測樹	樹幹解析・資料採取	1	
	野外活動	夏季キャンプ実習	2		造林	枝打ち実習	1	
	林業架線	ワイヤー加工	2		資格取得	小型移動式クレーン運転他	1	
	校外研修	北海道林業地視察	2		校外研修	木曽路探訪	2	
	造林	草刈機操作	2		木材加工	防腐加工施設見学	2	
7	造林	下刈り（草刈鎌）	1		資格取得	森林整備技術者資格試験	2	
	測樹	測樹	1		木材加工	集成材加工実習	2	
	樹木	樹木標本採取	1		樹木	樹木実習	1	
	造林	下刈り（草刈鎌）	2		12	造林	苗畠作業	1
	林業機械	高性能林業機械	2		木材加工	木材加工施設見学	2	
	治山	治山現場研修	2		1	野外活動	冬季雪中キャンプ	2
	土木材料	生コン工場見学	2		森林気象	冬季森林気象体験実習	2	
	特別講座	みこしまくり参加	2		特別講座	スキー実習	1	
8	特別講座	交通安全講話	1・2		特別講座	就職ガイダンス	1	
	木材商業論	原木市場・製材施設見学	2		特別講座	生活設計講座	1・2	
	体験研修	夏休み中実施	1・2		特別講座	ワーキングセミナー	2	
9	樹木	樹木標本採取	1		特別講座	接遇講座	2	
	森林土壤	土壤調査実習	1		特別講座	中部森林技術交流発表会	2	
	木材流通学	市場・製材・加工施設見学	2		特別講座	体験研修発表会	1・2	
	特用林産	炭焼実習	1					
	森林環境	御嶽山亞高山林の環境視察	2					
	森林風致	風致計画実習	2					

●長野県林業大学校 三つの強み

(1) 即戦力につながる多くの資格取得は、4年生大学にはない魅力です！

卒業と同時あるいは申請後に、

- *専門士（林業専門課程）称号の付与
- *労働安全衛生規則の特別教育終了証（伐木造材）
- *刈払機取扱作業者安全教育終了証
- *森林情報士2級
- *森林整備業務専門技術者
- *フォークリフト運転技能講習修了証
- *小型移動式クレーン運転技能講習修了証
- *造園施工技術者

等 15種類以上の即戦力になる資格が取得できます。



▼表③ 短期大学等初年度納付金比較表 (平成 18 年度, 長野県内データ, 単位: 円)

項目	入学金	授業料	施設整備費	実習費	合計
私立大学平均	330,000	1,338,667	1,046,000	616,600	3,331,267
私立短期大学平均	228,889	665,556	251,111	49,185	1,194,741
長野県林業大学校	5,650	118,800	0	115,000	239,450

■修学・生活に必要な年間経費 (平成 19 年度の場合)

1 学年	教科書代・研修費・教材費・給食費・寮費等 実験・実習に必要な用具類の購入費	740,000 115,000
2 学年		計 855,000 750,000

(2) 非常に経済的な環境のなかで、就職や進学に向け楽しく学べます。

*経費については、表③に入学初年度に必要な金額の比較表を示しましたが、全寮制であることからも、非常に経済的な学費で就職や進学に向けて学べる環境が用意されています。

*学生への非常に有利な資金として、林業就業促進資金（限度額月 5 万円・2 年間で 120 万円・無利子）及び（独）日本学生支援機構の奨学金が借りられます。

(3) 林大スタッフが、学生の進路が決まるまで親身に指導します！

*卒業生のほとんどが森林・林業関係に進路を決定し、人気の公務員は約 45% を占めており、これは、全国県立林業短期大学などの平均 20% と比べると圧倒的に高く、本校の大きな特徴となっています。これまでに 221 名の卒業生が林野庁などで活躍しています（図①）。

*4 年制大学への編入の道が開かれています。編入先としては、本校の外部講師で協力をいただいている信州大学が大半を占めています。

●寮生活

林業大学校の特色の一つに、寮生活があります。

「林業大学校に来て良かった」と卒業生が口をそろえるのは、「楽しい寮生活」!!



本校では、学生全員が入寮し、自主的運営による共同生活体験を通じ、有能な社会人となるための人間形成を図ります。

●地域社会との連携

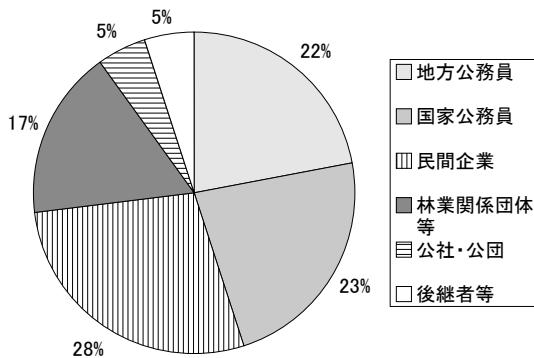
本校では、地域社会への貢献を運営方針の柱の一つにしています。

木曽地域の方々が集うお祭りなどには積極的に参加し、今や、木曽地域のさまざまなイベントにはなくてはならない存在になっています。学生の胸にも、一生の思い出として残っていきます。



▲伝統行事：みこしまくり

▼図① 就職状況割合



●より魅力的な学校にするための改革

ここで、現在進めている「林業大学校の改革のポイント」について少し説明しておきます。改革のコンセプトを、『森林・林業・木材産業の現場での課題に即戦力となる人材の養成』として明確に設定しました。そして、そのコンセプト実現のため、平成19年度より以下のツールを導入しました。それは、

- (1) 現場における実践研修の強化を図るため、『実習時間を約10%アップ』
- (2) 現場の求めに応じた人材の育成を図るため、『コース制を導入』
- (3) 地域、そして業界との連携を強化するため『インターンシップ（企業内体験研修）』を導入。
- (4) ホームページの刷新と、タイムリーな情報発信

そして、これらのツールの機能性をアップするため、新たに222haの演習林を三岳県有林に設けるとともに、森林情報士2級資格や樹木医補等の資格養成機関としての認定校としての認可手続きを進めています。

また、地球温暖化を契機として、森林を取り巻く環境を世界的視野で学ぶ必要が生じてきていることから、学生の国際感覚の醸成を図るため、平成20年度より2年生の北海道研修を海外研修に切り替えることを検討しており、平成20年度は、創立30周年記念事業と連携し、「海外調査事業：世界一の巨樹・巨木の森：セコイヤ国立公園と世界遺産ヨセミテ国立公園」を行います。

●新たなる林業大学校の魅力UPに向けて

前項で述べた「林業大学校改革」による内なる魅力のUPと外への情報発信に努めていますが、これらの改革を始めた大きな要因は、平成17年度入学者数が定員の約半数に落ち込んだことが挙げられます。

地球温暖化防止や災害防止等、国民の命と財産を守るための森林整備と、それを担う人材の育成はますます重要となっている今日、このことはわれわれ林業大学校スタッフにとって大変なショックとなりました。最重要事項として取り組んだ「林業大学校改革」の成果もあり、平成19年度は定員を確保し、20年度入学者も定員に達する予定です。

現在、林業大学校スタッフによるSWOT分析（企業戦略策定のための手法）から「強みと機会を生かし、弱みと脅威を克服する施策項目の整理」、「施策の具体化と実施スケジュール」などの検討を進めています。

(たけだ まさひろ)

長野県林業大学校までの交通

* JR中央線木曽福島駅下車。おんたけ交通バス開田高原線または一の萱線「社会体育館前」下車、徒歩1分。詳細はおんたけ交通(Tel 0264-22-2444)へお問い合わせください。

地域林業の担い手の育成確保のために

—島根県立農業大学校 森林管理科

菅田 勲

島根県立農業大学校 森林管理科 教授
〒 690-3405 島根県飯石郡飯南町上來島 1207
Tel 0854-76-2100 (飯南町) Fax 0854-76-2103 (飯南町)
E-mail : sugata-isao@pref.shimane.lg.jp



●森林管理科創設の経緯—教育機関の廃止と人材不足

(1) 高校林業科の廃止と危機感

林業に関する知識、技術を教育する機関として島根県では、かつて農林業を主体的に教育する農林高校に林学科があり、島根大学とともに専門教育を学ぶ場でした。

ところが、昭和 61 年度末に農林高校の林業科が廃止され、林業を専門に教える学科がなくなりました。また、この後大学においても教育内容の見直しが図られ、林業技術・技能を専門的に教える学部・学科が少なくなってきた。この時期は、昭和 50 年代後半からの林業にかけりが出てきたころで、本県の特用林産物である乾椎茸も円高ショックで中国産が多量に輸入され、価格が大きく下落してきた時期でもあります。



▲写真① 森林管理科がある中山間地域研究センター

▼表① 課業時間数

単位：時間 (h)

学年	講義	専攻実習等	卒論	特別教育活動	計
1年	470	826	-	224	1,520
2年	368	672	64	378	1,482

▼表② 主要教育時間

区分	主要科目名	科目数
森林管理系	情報処理, 森林計画, 樹木, 森林測樹, 森林マネジメント, 基本測量, 林業機械, 育苗技術, 森林保護, 木材利用 ほか	16
育成・利用系	情報処理, 林業概論, 森林計画, 森林マネジメント, 応用測量, 林業機械, 育苗技術, 森林保護, 木材利用 ほか	16
実習	専攻実習	各専攻ごと
卒論・特別教育活動	農大祭, 対外活動等	随時

このような状況下で私たち、県はもちろんのこと関係団体は、負の連鎖による将来の林業・木材産業の担い手不足に対して危機感を持ちました。

(2) 林業専門教育機関の創設—森林総合課程がスタート

こうしたことから、本県における林業の担い手育成について平成3年度から3年間をかけ基本構想、教育計画を練り上げました。そして、当時の県立農業大学校林業課程（1年制・定員5名）を2年制・10名定員とし、平成6年度から「森林総合課程」として特に即戦力となる技術・技能教育を中心とした人材育成を、大田市の農業大学校本校で行うこととしました。

(3) さらなる教育の充実を求めて—キャンパスの移転

このようにスタートした森林総合課程ですが、課業の半分あまりを占める実習は、本校の所在地である大田市には利用できる山林などの実習適地があまりなく、片道1時間かけて中国山地の麓の飯南町にある県有林まで行っていました。

さらに、スタートして10年が経過し、時代に即応した教育プログラムに変更する必要性も出てきました。フィールドの確保、講師である試験研究機関の協力、カリキュラムの充実を図るために、平成18年度に現在の島根県中山間地域研究センター内に「飯南キャンパス」として移転しました（写真①）。

●本格的な森林・林業教育機関を目指して—その教育内容

学生が在学の2年間で学ぶ教育のコンセプトは、担い手として必要な知識は広く、即戦力となる技術習得は実習等を通じて徹底的に行うこととしており、その内容は「知識教育」「技術教育」「技能教育」の3本の柱からなります。

(1) 知識教育—充実した科目

科目等は表①、②のとおりですが、2年生のときには森林組合等事業体で約1ヶ月間の



▲写真② 実習風景

現場実習を行い、実践での経験を積ませています。講師陣は、私たちスタッフ4名と研究員、外部講師等32名で対応しています。

(2) 技術教育—高性能林業機械と広大な実習林を活用した現場実習

従来からのチェンソーなどの機器を使用した機械技術実習は当然のこと、平成6年度の創設当初から森林管理科の実習用機械として導入した高性能林業機械（プロセッサ、タワーヤーダ）を利用した実習は、昨今の機械化林業に十分対応したものとなっています。

実習のフィールドは、森林セラピー基地にも指定されている県有林（県民の森：1,700ha）の一部を利用しています（写真②）。

(3) 技能教育—就業に必要な資格・免許等の取得

扱い手として就業したときに必要となる大特免許、小型移動式クレーン、フォークリフト運転技能をはじめ、ユニークなところでは森林情報士2級、救急法救急員など13あま

▼表③ 進路状況

平成7年度～平成19年度卒業生

自営	林業関係団体 (森林組合、認定林業事業体)	関連産業 (木材会社、造園)	公務員	他産業・進学	合計
0	37	41	10	21	109

りの資格・免許・講習などを全員に取得させています。さらにこれらの資格・免許取得後、現場でも経験を積ませるための実習を行っています。

●飯南キャンパス（森林管理科）の経費—学費・生活費

県が徴収するものとしては授業料（月額9,900円）のみで、課業に必要な備品、消耗品はすべて県が負担しています。したがって、学生個人が負担するものは、テキスト、服、鉈等で年間約15万円程度。また、寮を準備しており、寮費3,000円、光熱水費で月約1万円のほか、食費が必要となります。

奨学金制度があり、林業労働力確保支援センターからの「林業就業促進資金」（月額5万円）を受けることができます。ただし、卒業後は県内認定事業体に就職することという条件付きです（この場合、全額返済免除になります）。

もちろん、農大授業料等の減免制度もあります。

●地域林業の担い手として—卒業生の就職状況

卒業生の林業・木材産業への就職率は70%強となっています（表③）。なお、本県の場合、森林管理科の「担い手」の位置づけは、「認定事業体」の現場で働く技術者をいいますが、この事業体以外の就職については、本県の高校生の県内就職率が60%を切っている状況下（2006年）では定住化対策という側面もあり、本人及び家族の希望を第一として対応してきています。

また、本校は平成18年3月からハローワークと同じく職安法に基づく「無料職業紹介所」として登録し、幅広い就職活動を公的に行うことができるよう支援体制の充実を図っています。

●今後の課題—情報発信と、追い風をいかに生かすか

（1）情報発信—農大のPR

今、行政機関だけでなく民間企業においてもさまざまな情報発信が行われています。本校は「攻めの情報発信」という取組みを平成18年度から行っています。これは農大ホームページによるもの、もう一つは本県林業普及関係情報ネットワーク（ブログ）による情報発信の取組みです。

平成19年度において農大ホームページは全国農業大学校ホームページコンクールで第1位になりました。これには森林管理科で日常の課業をアップしているこのブログが大きく貢献したと思っています。ぜひご覧ください。

農大ホームページ <http://www.pref.shimane.lg.jp/nogyodaigakko/>

森林管理科ブログ <http://blog.goo.ne.jp/f-nodai>

(2) 追い風を生かす—入学生の確保

昨今、地球温暖化に関連して森林の公益的な働きが見直されています。また、温暖化関連で森林整備に関する事業も増加してきており、このための技術者の育成確保も課題として挙がっています。

こういった追い風を受けながら上記の担い手育成確保対策をいかに受け止め、生かすか、その手法を今まで以上に考えていく必要があります。これは一朝一夕ではありませんが、将来の職業に対する意識、定住に対する考え方などを本人自身が高校生の時ときから、さらには父兄、高校、私たち農大スタッフ、そして受入れ側である事業体が一体となって取り組むことが必要で、そのまとめ役としては、引き続き農業大学校が当たっていかなければならぬと考えています。

●終わりに

この記事を読んでおられる皆さん、いろいろなプロジェクトを進めるためには何が大切だと思われますか？ソフト（人材）でしょうか、ハードでしょうか。現在はどちらかというとハード部門の評価が高いと思います。なぜなら「物」を作ったという結果（成果）が目に見えるからです。一方、ソフト部門は戦略として必要だけれども物差しで測るようにはっきりと示せない部分があり、軽視されがちです。しかし、今、企業は戦略上人材養成・確保に傾いています。事業規模の維持・拡大のためには、従来型の単にマニュアル等に書いてあることだけを処理できる人材ではだめで、いわゆるノウハウも知り尽くし、応用の利く人材が必要となってきているからです。ですから、今後、森林整備などハード事業を進めるためには、もっと人材育成にも力を注ぐ必要があると思います。

私たちは森林組合等事業体で働く人材育成という大きな目的・使命を持っています。一般的に受け身の姿勢では、本当に知識、技術等を吸収し自分のものにすることはできませんので、こうならないように日常の課業で最も心がけていることは、私たちも学生も、少しでも楽しみながら能動的な姿勢で学ぶということです。幸いにも森林管理科の学生は、卒業後の就職についても入学時から、あるいは在学時には目的意識を持つなど、積極性を感じられ、これが強みだと思います。

学生が森林管理科で学ぶ知識、技術等は本人にとって将来にわたっての単なるステップの一つに過ぎません。卒業後現場で、またそれぞれの地域で経験を積み、仕事に限らず地域社会のいろいろな分野での担い手となってくれることが、私たち島根県立農業大学校森林管理科の願いです。

(すがた いさお)

島根県立農業大学校森林管理科までの交通

*松江駅、出雲市駅から高速バス 1 時間 30 分で町役場のある赤名へ。途中、中城子下車

徒歩 5 分。町営生活路線バスがあるが本数僅少。

*島根県中山間地域研究センター内

後進を育てるここと、私の思い

—京都府立農業大学校 林業課程

私は京都府立農業大学校林業課程に、この3月まで在職していました。農林業を志して入学してくれる学生に接して私が感じたこと、そして、これから後の後進の育成について、ささやかながら「思い」を述べさせていただきます。

本校に入学する学生は高卒者が主体ですが、40歳未満を対象としているため、近年は20代、30代の学生も増えています。将来の展望をしっかりと持ち、確固たる志を持って入学する者がいる一方、森へのあこがれで入学する者もいます。農林家の子弟もいますが、その数は少なくなっているのが現状です。

農林業の扱い手不足は以前から言われています。その指導の現場から見ると、単に高校や大学校、大学の専門教育だけでは対応しきれない問題が数多くあることを痛感します。勉学の基礎は小学校からの積み重ねであることは言うまでもありません。ですが、それらの知識が有機的につながっていない場合が見られます。特に農業大学校では講義時間数に匹敵するほどの実習があり、指導を受けながら自ら実践していくことで、必要な知識と技能を修得していくわけです。その基礎になる農林業の作業を、全く経験したことのない者が少なからず見られます。今年で50歳になる私も、実は子どものころの農業の体験がほとんどありません。それでも、家族や周辺の農家の皆さん方の作業は見ていました。現在では、そのような光景すら見かけたことがないという学生が増えているのです。

林業に至っては、何をかいわんやです。世間一般に、森林の持つ環境面の重要性だけが強調されているためでしょうか、森林の保全には興味を持っているけれども、林業の重要性や木材生産の現状については、知識も体験もほとんど欠落したまま入学してくる状況です。

本校では、1年生の前期に各専攻（野菜、水稻

前京都府立農業大学校林業課程 教務部
現京都府立大学 生命環境学部 附属演習林
〒606-8522 京都市左京区下鴨半木町1
Tel 075-703-5681 Fax 075-703-5680
E-mail : t-joke36@mail.pref.kyoto.jp

などの作物、茶、花き、果樹、畜産）ごとの「概論」が必修となっており、林業概論も講義があります。興味を示さない学生も中にはいますが、農林業は一体的なものだということ、林業は環境や国土を支えているとても重要な仕事であることを伝え、また、造林木は植栽してから収穫まで手入れが必要であり、それを利用する事が重要なことを説明しています。「伐採は良くないこと」という認識は、私たちの想像以上に根強く残っているのです。

林業概論の試験時に設問の一つとして、講義を受けた感想を自由に記入してもらいます。A3用紙の裏面いっぱいに書いてくれる学生が多く、「林業は農業をやる者にとっては関係ないと思っていたけれど間違っていた」と感想を書いてくれた学生がいて、講義した甲斐があったと実感しました。

日常の生活と農林業が切り離されている状況の中で、植物や動物を育てる、収穫して食することなどを通じて、生命の大切さやその苦労を理解し、体感することが大切です。それは教えられるものではなく、自らがそのように感じ取ることが必要です。その手助けをするのが家庭でのしつけであり、学校での教育ではないかと思います。しかも、できるだけ子どもが小さい時期に、その大切さを伝えることが今求められていると思います。

農業大学校に入学するような年齢の若者にも、今はそれを伝えなければなりません。同時に、基本的な情報であっても、繰り返し伝えることが必要だと痛感しています。

さて、農林業に関する基本概念が希薄で、ややもすると軽視されるのはなぜでしょうか……。

私自身の立場は変わっても、農林業の重要性を若者たちに、子どもたちに、そして大人の皆さんにも正しく理解してもらえるよう、努力を続けていきたいと考えています。

(じょうけ たすく)

岩手・木質バイオマス研究会の あゆみと現状・課題

—木質バイオマス普及パンフレット

『火のある暮らしを楽しむ』
の発行にあたって—



岩手・木質バイオマス研究会

〒 020-0861 岩手県盛岡市仙北 1-14-20
Tel & Fax 019-635-8272 E-mail : wbi@xg.main.jp

●はじめに

去る 2008 年 2 月 23 日、岩手県及び岩手・木質バイオマス研究会（以下、「研究会」）主催、いわてハウジングフォーラム共催により、薪ストーブ・ペレットストーブ導入のための公開講座「火のある暮らしを楽しむ」が開催されました。

この公開講座は、薪ストーブやペレットストーブを導入したいと考えている方や、そのような方を顧客に持つ工務店等の方々を主な対象者として、導入のコツをわかりやすく説明しようと企画したものです。

月末・年度末の忙しい時期の開催でしたが、当初の予想をはるかに超えて 80 名ほどの方に参加いただき、昨今の原油高を背景にしながら、薪やペレットといった身近な木質バイオマス利用が、一般の方から建築関係のプロの方まで大変に関心が高まっていることを実感できました。

この公開講座のテキストとして作成したのが、木質バイオマス普及パンフレット『火のある暮らしを楽しむ』です。このパンフレットは、岩手県の委託を受けて研究会が作成したものですが、作成にあたっては、ストーブを導入するための計画から設置、運用に至るまでを、研究会メンバーである専門家がポイントを押さえてわかりやすく解説しています。また、表紙をはじめ随所にそう入されているイラストも親しみやすく、ユーザーと工務店等との橋渡しとなる、これまでにない画期

的なものとなっています。

研究会は 2000 年 7 月に設立し、今年で 8 年を経過しようとしていますが、この間、木質バイオマスを巡る社会状況の変化は著しく、なお課題は多いとはいえ、今や木質バイオマスは県民の間に広く認識されるに至りました。これまで研究会は、フォーラムや公開講座の開催など、さまざまな機会を通じて木質バイオマスの普及啓発を行ってきましたが、こうした情勢の変化に伴い研究会の活動も、一般的な普及啓発からさらに一步踏み込んだ、より具体的なものとなっていました。

本稿では、全国各地で積極的に進められている木質バイオマスの取組みの参考になるよう、研究会のあゆみと現状・課題について述べていきます。

なお、『火のある暮らしを楽しむ』パンフレットの内容は、岩手県林業振興課のホームページに掲載される予定となっています。

●研究会のあゆみ

(1) 研究会の設立

研究会の出発点は、2000 年 3 月のスウェーデン・オーストリアミッションにさかのぼることができます。後に、研究会のコアメンバーとなる 3 人が、ヴェクショ一市をはじめとする木質バイオマス利用の先進的な取組みを視察、帰国後間を置くことなく 2000 年 7 月 5 日、研究会が設立されています。

(2) 前期の活動展開

研究会の活動は、大きく二つの画期としてとらえることができます。一つは、設立から2003年ごろまで、もう一つは2004年以降です。

2003年ごろまでは、いわば木質バイオマスに関するさまざまな情報等の蓄積と草の根の普及活動の時期でした。特に、JETRO（日本貿易振興機構）のミニLL及びLL事業^①によるヴェクショーアートと3年間にわたる交流では、岩手県内外の木質バイオマスの取組みに大きな影響を与えることになりました。スウェーデンへのミッション団の派遣やスウェーデンからの専門家招へいを通じて、木質バイオマスに関するさまざまな知識や情報が蓄積されました。この活動を通じて、林業振興にとどまらない社会システム全体の転換を視野に入れた考え方が醸成されていったのです。その成果は、2001年に作成された「岩手型木質バイオマス利用の行方—2000年度活動報告」（以下、「提言書」）にすでに現れており、今日の木質バイオマスを巡るさまざまな課題がすでに見通されています。

研究会設立当時、岩手県における「木質バイオマス」の認知度はほぼゼロに等しかったといえます。全国的にも木質バイオマスが認知されるのは、2002年の新エネ法改正において木質バイオマスがその対象に組み込まれて以降であり、それに先駆けての活動は、「木質バイオマスとは何か？」といった基本的な部分について繰り返し普及活動を行うといった地道なものでした。また普及状況は、一部でペレットボイラの導入が行われていたものの、岩手県産ペレットの中心であったバークペレット^②に対応したペレットストーブが存在せず、県民レベルでの「利用」の段階へは至りませんでした。前述の「提言書」では、燃焼機器の開発が普及の力ぎを握るとして、とりわけペレットストーブの開発を強調しています。

(3) 後期の活動展開

こうした状況が大きく変化したのは2004年ごろからです。研究会が提言したペレットストーブ開発が現実のものとなり、2003年には県内企業

と岩手県工業技術センターが共同開発したペレットストーブ（業務用）が一般販売され、また翌年には家庭用のペレットストーブが発売となり、一般市民に対応したペレット流通と市場形成が喫緊の課題となりました。

これと前後して、2003年に岩手県は「いわて木質バイオマスエネルギー利用拡大プラン」を策定し、部局横断的なプロジェクトとして木質バイオマス関連施策が展開していくことになります。

これらのこととかかわって研究会は、岩手県の木質バイオマス関連施策における、主に普及啓発関連の事業を受け止め、木質バイオマスフォーラム^③や公開講座などを実施してきました。

また、木質バイオマス利用が急速に普及し、一定の市場が形成されていく一方で、その過程で生じる新たな問題や課題、具体的には、個別の企業だけでは解決困難な、木質バイオマスの社会システムにかかわるような問題や課題への対応が求められるようになりました。

●木質バイオマスを巡る状況の変化

研究会の活動展開に現れているように、木質バイオマス利用が普及するに従って研究会の役割もまた変化していったわけです。以下では、具体的にどのような状況変化があったのかについて、大きく五つの点から整理してみました。

(1) 木質バイオマス利用機器の普及

岩手県内における2008年3月末時点でのペレットストーブの導入台数は1,100台以上と推計されています。県の利用拡大プランの目標数値である2,000台には及ばなかったものの、当初ペレットストーブ自体が非常に珍しく入手しにくいものであったことを考えると、大きく進展したと評価できるでしょう。

早い時期からスイミングスクール等で実績のあったペレットボイラですが、2002年に林野庁の補助事業の対象となって以降急速に導入が進み、現在では県内27施設に41台が導入されています。また、さらに今後も導入が予定されている施設が数件あります。

チップボイラもまた、さまざまな補助事業等の登場と利用実績の積み重ねから導入が進み、県内12施設に16台が導入されています。2006年には県内企業と岩手県工業技術センターの共同によるチップボイラも開発され、さらに導入する施設の増加が期待されています。

(2) 木質バイオマスビジネスの一定の成立

上記のように、木質バイオマスの燃焼機器の普及が進むとともに、木質バイオマスのビジネスが一定程度形成されるようになりました。

当初外国製が中心であったペレットストーブは国産製品の開発が進み、県内企業だけでなく国産ストーブの選択肢が大幅に増えました。

木質ペレットの製造に関しては、当初岩手県内で1社のみが製造を行っている状況から4社へと増加しました。燃料用ペレットの生産は年数百トンにとどまっていたものが、現在では2,000トンを上回り、需給が逼迫する状況も現れています。

一般家庭へのペレットの流通もまた一定程度確立されました。当初のペレットの入手は工場からの直接購入しかありませんでしたが、現在では80店舗近い小売店で取り扱われ、岩手県内などの地域でも入手可能な状況となっています。

(3) 岩手県のバイオマス政策の転換期

岩手県の木質バイオマスエネルギー利用拡大プランは2006年度で一旦終了し、2007年度以降のプラン（第2ステージ）が策定されました。取組みの局面も、初期導入から定着期へと移行し、課題もより具体的なものとなっています。

研究会においても、定着期に向けた新たな取組みの必要が出てきています。

(4) 全国的な動向

木質バイオマスのトップランナーであった岩手県ですが、今日全国の各地域での取組みが活発化するに従い、岩手県や研究会の全国における位置づけも変化しつつあります。

一つは、各地域の取組みが活発化し、各種フォーラム、シンポジウムが多数開催されるようになりました。これにより、岩手県から全国に積極的に発信してきた木質バイオマスフォーラム等

の必要性が薄らいできた面が指摘されます。2007年のフォーラムでは、他地域で開催される木質バイオマス関連のフォーラムと日程が前後するなどしました。

もう一つは、全国にペレット工場が20社以上設立されるに及んで、ペレットの規格や流通の問題が岩手県内の問題にとどまらなくなってきたことです。当初、ストーブとペレットのマッチングをわかりやすく表示する必要に迫られ、2003年に岩手県と研究会によって「木質ペレット規格案策定事業報告書」を作成しましたが、ストーブ、ペレットの全国的流通が現実のものとなり、全国的な統一規格などの検討が林野庁の事業を通じて行われるようになりました。また、規格を取りまとめて、運用していく全国団体がここ1~2年のうちに設立される予定です。ペレットの流通に関しても、ペレット生産者が相互に安定供給を担保することなどを目的とした「東日本木質ペレット安定供給協議会」が設立されるなど、業界としての自律的な展開が見られるようになりました。

(5) 会員のニーズの変化

研究会は全国に先駆けて設立した木質バイオマス関連の団体であったため、岩手県内にとどまらず全国から多くの会員が入会しました。その入会動機は明らかではありませんが、近年の退会者の特徴を見ると、行政の担当者が交代して退会する場合が最も多く、次いで、コンサル・設備系企業の担当者などの退会者が近年目立っています。

これらの理由として考えられるのは、木質バイオマスに関する情報が非常に限られていた時期において、研究会は有用な情報（特にスウェーデン等の情報）を提供してきましたが、近年木質バイオマスの普及、各企業での開発の進展など、高度かつ専門的な情報が個別に蓄積されてきており、すでに研究会から提供すべき情報が少なくなってきたいることが考えられます。

しかしながら、研究会の運営、事業に積極的に参画する会員からは、その敷居の低さや顔の見える関係の交流などが研究会の優れた面として指摘され、設立当初から培ってきたネットワークの存

続・発展へ期待するものは高いと考えられます。

●研究会への新たな期待や課題

以上のような状況変化を踏まえつつ、今後の研究会にはどのような期待や役割があるのかについて、次の五つの視点から整理してみました。

(1) 未解決の諸課題への取組み

木質バイオマス利用が一定程度普及し、短期間で大きな成果を上げたわけですが、このことによって新たな課題が生じる一方、当初から課題とされつつも未解決のまま今日に至るものもあります。

具体的には、森林整備や林業振興に結びつくような仕組みづくり、林地残材の利用、ペレットにとどまらない幅広い木質バイオマスの利用、グリーンファンド等の研究など多数あります。木質バイオマスをキーワードとした循環型社会の構築に向けたさまざまな取組みが、今後とも期待されています。

(2) 継続的な普及啓発活動

木質バイオマス利用が普及してきたとはいえ、岩手県内においても地域ごとに取組みの温度差が存在し、バイオマス利用がほとんど進んでいない地域もあります。また、県民にとって木質バイオマスが一般的な選択肢になっているかといえば、むしろ未だ特殊な選択肢だといつていいでしょう。^{いま}

環境意識の高いユーザーや特定の地域での導入が一段落した今後こそ、普及啓発活動が重視されることになるでしょう。さらなる普及拡大は環境意識の底上げによって実現されると思われますから、継続的な普及啓発活動は今後さらに重要なしていくでしょう。

(3) 政策提言

研究会の活動の大きな成果として政策提言があったことはすでに述べましたが、今後も政策提

言は重要な活動の一つとして位置づけられます。循環型社会の実現を加速し森林との結びつきを確かなものにしていく、といった次の社会システムの形成に向けた政策提言を定期的に行っていく必要があります。

(4) 情報の集積、発信

研究会の担ってきた役割のうち、情報の集積と発信は全国的な普及に伴ってその役割は薄らいだといえます。その一方で、今日の木質バイオマスを巡る諸課題は、より地域的、具体的なものになりつつあり、そうした実践的課題に即した情報の集積と発信は、より重要な意味を持っています。

また、企業による研究開発が進む中で、必要とされる情報が公になりにくくなってきており、そうした社会的に必要な情報を収集、発信していくことも求められています。

(5) 会員間の自由な交流の場

木質バイオマスの取組みが地域的にも業態的にも個別化していく傾向にあるなかで、比較的自由な交流の「場」が貴重なものになっている点が指摘されます。研究会という「場」において横断的な連携が形成され、それが直接的間接的に今日の飛躍に結びついていることは、実は最も重要で、他地域にはない研究会の優れた特徴といえます。

●おわりに

これまで述べてきたように、木質バイオマスの普及は、研究会の発足当初から比べれば格段の進歩を遂げましたが、その定着という点では、まだスタートラインに立ったばかりといえます。今後も、会員相互の連携や親睦を深めながら、岩手の風土・地域性に根差した循環型社会の形成に向け、木質バイオマス利用の普及に取組んでまいりたいと思います。

※注※ 1) LL事業: JETRO(日本貿易振興会)が地域産業の国際化を支援するため、1996年度から実施している「ローカル・トゥ・ローカル産業交流事業(LL事業)」。国内と海外の経済交流活動を支援することにより、技術・資本・デザイン等の提携、共同研究・開発、部品・製品の相互調達等の多様な産業交流を展開することを目指し、地域経済の活性化を図るもの。

2) バーケペレット(樹皮ペレット): 樹皮を主体とした原料を用いて製造した木質ペレット。財団法人日本住宅・木材技術センターが策定した木質ペレット品質規格原案(2007.9.21)では、ペレットを、木部ペレット、樹皮ペレット、全木(混合)ペレットに大きく3区分している。 3) 木質バイオマスフォーラム: 2004年に開催したバイオマスサミットを引き継ぐ形で、2005~2007年にかけて岩手県、盛岡市、岩手・木質バイオマス研究会の主催で開催されたシンポジウム。

林業技士養成研修 Q&A

—林業技士養成研修の再チャレンジ制度ほか—

(社)日本森林技術協会 林業技士事務局

〒102-0085 東京都千代田区六番町7
Tel 03-3261-6692 Fax 03-3261-5393 HP : <http://www.jafta.or.jp>

Q : 林業技士養成事業の再チャレンジ制度は、どのようにになっているのですか。

A : 林業技士養成事業の再チャレンジ制度としては、これまで、日本森林技術協会が定める林業技士養成事業実施要綱及び同実施細則の「II 林業技士の資格認定」に基づいて、

①前年度の通信研修のレポート未提出者及び成績不合格者については、次年度に限り、無料で通信研修の再受講が、また、

②通信研修合格者で、スクーリング研修の未受講者、成績不合格者については、同じく次年度に限り、再び、有料でスクーリング研修の受講ができることが認められています。

したがって、通信（レポート）試験の合格者であっても、3年目には、再び有料で通信研修から受講していただくことになります。

なお、無料か、有料かについては、次年度の予算事情によって決められることから、「これまでの養成研修では、そのようになっておりますが、具体的には、次年度の4月以降に通知します。」とお答えしているところですので、ご留意いただ

きたいと思います。

資格要件審査については、この再チャレンジ制度はありません。

(参考) 林業技士養成事業実施細則

「II 林業技士の資格認定」

2 養成研修の終了認定を受けることができなかった者については、次年度に限り、通信研修及びスクーリング研修の再受講を認めるものとする。

*

Q : 林業技士の英文名は何か。森林総合監理は何と訳すのですか。

A : 林業技士は、日林協のホームページの English 版では次のようになっています。

(Japanese registered) Forest Engineer
また、**森林総合監理部門は、**
Forest Comprehensive Technical Management という訳が考えられます。
ご参考としていただけましたら幸いです。

木材は有機物質であるため、燃焼する。燃焼するので薪であり、最近ではバイオ燃料としてチップ燃料や木質ペレットなどが話題になっている。一方、燃えるがゆえに「木材は火に弱い」、さらには「木造は火事で危険」といわれてきた。事実、未だに火事の報道がされると「木造2階建」、「木造平屋建」で死者というように、「木造」がつくことが多い。「鉄筋コンクリート造」とか「鉄骨造」が頭につくことはほとんどない。消防活動や避難時における、建物崩壊、熱や炎の拡大遅延を考慮すると、単純に木材とか木造で規制することの不合理性が指摘されてきた。とはいものの古い木造の火の回りが早いことは今もって紛れもない事実である。

1998年に改正された建築基準法（改正基準法と呼ばれている）で建築基準の防耐火性能の規定が導入され、木造にとって自由度の高い設計が可能となった。10年ほど経過してみると、要求される防耐火性能に即した木造建築物が各地で見ら

れるようになってきた。

その性能を法律の表現で記すと頭が痛くなることが多いので、簡単にいうと準防火、防火性能は建物周囲からの火災に抵抗するための性能であり、前者は外壁に、後者は外壁と軒裏に適用され、その耐える時間で区分されている。準耐火、耐火は建物周囲と建物内部の両方の火災に対抗するため

に要求される性能で、すべての主要構造部が対象となり、前者は3階建て以下、後者は大規模建築物や特殊建築物が主として対象となっている。

さて、そこで対象となる木材、主として製材であるが、日本農林規格、寸法などの仕様によって

使用の可否が生じる。木であれば何もしなくて良いという状況ではない。各種室内における内装制限についても、板厚や施工仕様などで可能性は大きく拡大しており、木材の専門性が問われている。

蛇足ながらどんな防耐火性能を有した建築物であろう、「火の用心」を忘れてはならない。

- ◆新刊図書紹介◆
- 〔林野庁図書館・本会普及部受入〕
- 森と人間 生態系の森、民話の森 著者：田嶋謙三・神田リエ 発行所：朝日新聞社 (Tel 03-3545-0131) 発行：2008.1 B6判 251p 本体価格：1,200円
 - 手にとるように地球温暖化がわかる本 著者：村沢義久 発行所：かんき出版 (Tel 03-3262-8011) 発行：2008.1 B6判 237p 本体価格：1,400円
 - 樹木と文明 樹木の進化・生態・分類、人類との関係、そして未来 著者：コリン・タッジ 発行所：アスペクト (Tel 03-5281-2551) 発行：2008.1 B6判 522p 本体価格：3,800円
 - 近世吉野林業史 著者：谷 彌兵衛 発行所：思文閣出版 (Tel 075-751-1781) 発行：2008.1 A5判 507p 本体価格：9,300円
 - 究極の森林 著者：梶原幹弘 発行所：京都大学学術出版会 (Tel 075-761-6182) 発行：2008.3 四六判 204p 本体価格：1,800円
 - イラスト図解 林業機械・道具と安全衛生 編：月刊『林業新知識』 文・イラスト：鶴岡政明 発行所：全国林業改良普及協会 (Tel 03-3583-8461) 発行：2008.3 四六判 207p 本体価格：1,900円
 - イラスト図解 造林・育林・保護 編：月刊『林業新知識』 文・イラスト：鶴岡政明 発行所：全国林業改良普及協会 (Tel 03-3583-8461) 発行：2008.3 四六判 207p 本体価格：1,900円

注：□印=林野庁図書館受入図書 ○印=本会普及部受入図書

▼写真③ 美味しい神山さんの手打ちそば



▼写真② 神山さん



▲写真① 関さんの指導を受ける筆者

▲写真④ とうじそば(上)と、とうじかご、おたま(下)

のし終わると、そばを切りやすくなるためにたたみ、めん切り包丁で切ります。神山さんは、こま板を使わずに太さを揃えて仕上げます。茹でるお湯ができるまで、そばを乾燥しないように平たい四角の缶に入れてくれます。

お湯が沸騰したら、そばを軽く取り上げて打ち粉を払いながら茹でます。そば同士がくっつくことのないように箸で静かにかき回します。二分ほど茹でると、そばは浮いてきますから急いで手付きざるで掬い冷水で洗いそばのぬめりを取り、水切りをすると、コシのあるそばができ上がります(写真③)。

今回のそばつけ汁は、神山家特製のヤマドリの肉とニンジン、ネギなどの野菜がたっぷり入った汁

で、前回三月に貰味したつけ汁と違った味で季節と合わせた気配りの汁で、体も温もり美味です。

関さん、神山さん、ご協力ありがとうございました。

各地の美味しいそば

食べ物の好き嫌いは、人によつて違いますから、無理に

は薦めませんが、筆者が食べて美

くするためにたたみ、めん切り包丁で切ります。神山さんは、こま板を使わずに太さを揃えて仕上げます。茹でるお湯ができるまで、そばを乾燥しないように平たい四角の缶に入れてくれます。

お湯が沸騰したら、そばを軽く取り上げて打ち粉を払いながら茹でます。そば同士がくっつくことのないように箸で静かにかき回します。二分ほど茹でると、そばは浮いてきますから急いで手付きざるで掬い冷水で洗いそばのぬめりを取り、水切りをすると、コシのあるそばができ上がります(写真③)。

今回のそばつけ汁は、神山家特製のヤマドリの肉とニンジン、ネギなどの野菜がたっぷり入った汁で、前回三月に貰味したつけ汁と違った味で季節と合わせた気配りの汁で、体も温もり美味です。

関さん、神山さん、ご協力ありま

味しかった“そば”を二、三紹介します。

1 山形県の板そば

山形県は、山形そば街道と称して近ごろは顧客の評判が高いようです。駅長推薦のそば屋だけでも

約六〇店あります。

山形、特に村山地方は板そばが多く、地粉で打ったコシの強いそばです。大きな木の箱にそばを盛つて出してくれます。まあ食べよ

うと、食欲がわきます。そばの香りを感じ田舎そばそのものです。

2 福島県の山都町、大内宿のそば

してあると茹でて水切りしたばかりのそばが食べられます。山都町は水うどんも美味です。

3 新潟県のへぎそば

へぎそばは、器は山形県の板そ

ばに似ていますが、つなぎに海藻を入れたそばが多いようです。魚沼市(旧入広瀬、湯之谷村)の山間部で食べたそばは、そばの香りとのど越しがよく美味です。

4 長野県の戸隠、穗高町のそば

そばと言えば、信州そば、長野

県にはそばの専門店が多い。筆者も善光寺、戸隠に行くたびにそばを食べますが、穂高町のそばも美

味です。注文を受けてから主人がこね、切り、茹でるので時間がかかりますが、周囲の山々を眺め夏はビールを飲みながら待ちます。素朴な店で冷たいざるそばは実際に食べます。寒いときにもう一度美味です。

昨年開田村にしばらくぶりで入り、“とうじそば”(写真④)を注文しました。とうじかごとおたまを使って吃るのは旅の疲れがつて出してくれます。まあ食べよ

うと、食欲がわきます。そばの香りを感じ田舎そばそのものです。その他関東近県にも紹介したい美味な逸品がいろいろあります。

そばと人とのかかわり

そばは、山村の食文化であり、健康食品として評価されています。が、ソバを作らない地域があります。

永禄十二年(二五六九年)の三

増峰の合戦で敗れた武田軍勢の一部が夜道に退路を誤つて南に逃げ市島(厚木市棚沢)まで来たとき、

白波と見間違え、中津川の川音を海鳴りと勘違いして、北条の領地に入り込んだと思い自害した。以来この地では落人の供養のためソバを作らないと言います。

BOOK
本の紹介

依光良三・小林那々緒 著

入門 環境保護と森林

発行所：(有)富士書房

2006年5月発行 A5版 167p

定価：1,200円（税込み、送料別）

本書購入等の連絡先：高知県立高知農業高校森林総合科
小林那々緒宛

〒783-0024 高知県南国市東崎 957-1

TEL 088-863-3155 FAX 088-863-6209

地球規模で環境問題への取組みが課題となる中で、森林が環境に大きな役割を果たしていることはよく知られている。森林が環境に果たす役割について広く伝える森林環境教育の取組みも進められている。では、「森林と環境」との

関係についての説明を求められたら、どうであろうか。森林と環境の話をするには、幅広い内容をとらえ、さらに近年の国際的な動向も踏まえていないと難しいのではないだろうか。この困難な課題に直面しているのが、森林・林業に

関する専門高校である。この課題に応えるべく、高校生など初心者のために森林と環境について解説した画期的な入門書が高校教師により編纂、出版されていたので、ここに紹介する。

本書は、入門書と言っても幅広い内容が詳しく解説されている。本書を構成するキーワードを挙げると、1章は森林減少の歴史と地球サミット、2章は温暖化と酸性雨、3章は生物多様性、4章は日本の森林利用の変化と自然保護、5章は人工林問題と市民参加などである。この中には、フィリピンやアマゾンなど海外の事例やカラ

ひびく

京都議定書6%削減約束の達成に向けて

去る、3月28日、政府は「京都議定書目標達成計画」（以下、目達計画）を閣議決定した。今年から第1約束期間に突入しており、温暖化対策も待ったなしの状況である。特に7月7～9日には温暖化対策が主要テーマとなる「洞爺湖サミット」も開催されることから、わが国が温暖化対策において国際的にリーダーシップを発揮するためにも6%削減約束の達成に向けた取組みをアピールすることは重要になろう。この目達計画の中で、森林による吸収量で1,300万炭素トン（3.8%分に相当）を

確保することを目標とすることが位置づけられている。このため、昨年2月から官民一体となって取り組んでいる「美しい森林づくり推進国民運動」をさらに展開し、国民全体に森林を手入れすることの重要性を浸透させていくことが必要となる。来たるGW期間中の5月4日はみどりの日。国民が緑に親しむ日との観点から、国公立公園の無料開放などを全国で実施する予定。また、5月10～11日には東京・日比谷公園で「みどりの感謝祭」が開催される。今年も苗木の無料配布が行われる予定

だ。GW期間中に家族みんなで森林の大切さについて考える良い機会として参加してみてはいかがだろうか。こうした取組み一つひとつが6%削減約束の達成につながるものとなる。「伝えたい木の文化、残したい美しい森」の精神に基づき、まず一人ひとりができる事に取り組んでいく気持ちを大事にしたい。なお、「美しい森林づくり推進国民運動」については、下記URLで紹介されている。

（チーム・マイナス3.8%）
(この欄は編集委員が担当しています)

<http://www.rianya.maff.go.jp/utsukushiimoridukuri.html>



一写真、生物多様性に関する年表などの最新情報、さらに詳しく知りたい人向けの補論も掲載されている。

本書は、林業を担当する高校教師と、環境問題に造詣の深い専門家との共著である。著者の勤務する高知農業高校では「森林環境」が学校独自の科目として教えられているが、文部科学省による教科書は10年に1度しか改訂されないため、不足する情報を補う教材として本書が活用されている。各ページには理解を助けるための図表や写真がふんだんに盛り込まれ、初心者向けの教科書としての工夫がなされており、非常にわかりやすい。さらに、自然科学に関する研究、隨筆を表彰する寺田虎彦賞（平成18年度）を受賞している点でも注目される。

森林や環境について学ぶ高校生や大学生のテキストとしてはもちろんのこと、森林について教えたい学校の先生や一般の方々の興味もそそる一冊であると思う。また、森林にかかわる近年の動向を手軽に押さえるための解説書としても役立つようになっている。森林・林業関係者を含む多くの方に一読をお薦めしたい。

（森林総合研究所 多摩森林科学園
／井上真理子）

こだま

メタボリック症候群

40歳を過ぎてから、お腹の周りの肉が目立ってきた。食事もコレストロールに気をつけていてもかかわらず、悪玉コレストロールの値は基準を超え、体重は増える一方である。高脂血症は、30歳を過ぎてからかかった。しかし、そのときは体重は気にならない程度であったので、経過を見ていた。高脂血症は、そのままにしておくと動脈硬化を引き起こし、脳卒中や心筋梗塞といった死に至る病気の原因になる病気であり、メタボリック症候群と密接に関係するそうである。一昨年から、お腹のお肉が気になり、食事等を気をつけていたが、改善が見られない。また、太ってくると億劫になって、運動をしたくなくなる。適度な運動が必要なのである。毎日30分の運動もしくは、60分の運動を週3回やることが必要だ。また、ストレスも良くないそうだ。脳にストレスを受けると、新陳代謝等の機能が低下し、肥満になる。心身ともに健康でなければ、メタボリック症候群は防げないのである。

私は、改善の余地がないため、医師に相談し、薬事療法を取ることにした。薬によっては肝機能に副作用を及ぼすものもあるようであるが、最近では副作用も少なく、服用回数も少ない薬があるようである。

いずれにしても、肉や揚げ物等の油が多い食事に気をつけ、カロリーの高いお酒も少しにし、適度な運動に心がけなければならない、また、ストレスも溜めないようにしなければならない。自覚症状がないから、真剣に考えてこなかったツケがきてしまった。薬代もかかる。

今月（4月）から、医療制度改革により健康診断において、メタボリック・シンドロームに関する検査が追加されるそうだ。最近、お腹の周りの肉が気になってきた諸君、気をつけたほうがいい。自覚症状がないから、ジワリジワリと症状は進む。日ごろからの心がけが重要である。

（スモーキーベアー）

（この欄は編集委員が担当しています）

平成 19 年度 森林情報士 合格者氏名

(平成 19 年度 森林系技術者資格認定合格者)

平成 20 年 3 月 14 日

社団法人 日本森林技術協会

●森林情報士制度は、空中写真やリモートセンシングからの情報の解析技術、GIS 技術等を用いて森林計画、治山、林道事業、さらには地球温暖化問題の解析などの事業分野に的確に対応できる専門技術者を養成することを目的に平成 16 年度から実施しています。平成 19 年度は、昨年 8 月、森林 GIS2 級部門の研修が実施されました。

●平成 19 年度の研修結果は、3 月 14 日に開催した森林系技術者養成事業運営委員会（委員長：佐々木恵彦氏）による審査で、当研修修了者の森林情報士資格認定者（合格者）が決定しました。

これらの資格認定者は、（社）日本森林技術協会の森林情報士名簿に登録することによって「森林情報士」の称号が付与されます。

●今後、森林情報士は、わが国の森林資源にかかる各種調査や森林計画業務ならびに森林整備等において中核的な担い手として、その重要性が一層増加するものと期待されます。

《森林情報士 2 級資格養成機関登録認定》

●所定の大学等の単位を取得すると、森林情報士 2 級の資格が得られる「森林情報士 2 級資格養成機関登録制度」を平成 17 年度から実施しております。平成 19 年度は、2 月 20 日の第 2 回森林情報士 2 級資格養成機関登録委員会（委員長：木平勇吉氏）の審議を経て、3 月 14 日に開催した森林系技術者養成事業運営委員会（委員長：佐々木恵彦氏）で承認を得て、次の大学等を登録認定しました。

●認定校として認定を受けた大学等…信州大学、三重大学。

●所定の単位には達しないが、卒業後の経験年数等により 2 級の資格が授与される準認定校…信州大学、静岡県立農林大学校、鹿児島大学、日本大学。

1. 森林 GIS2 級（20 名）

都道府県名	氏名
東京	岩本愛子
三重	西尾昇
長野	野本宏一
北海道	藤田昌也
栃木	菱沼政雄
埼玉	石塚公人
北海道	高森淳
北海道	木下あすさ
北海道	澤田敏史
愛知	吉橋秀典
高知	長井宏賢
東京	菅野明芳
北海道	森谷竹志
山形	諸橋伸忠
東京	花房典昭
山形	布施和則
山形	大山正平
埼玉	森岡千恵
大分	川津憲治
東京	手島茂晴

森林情報士事務局

Tel 03-3261-6968

Fax 03-3261-5393

《森林情報士 2 級資格養成機関年度別・部門別登録状況》

区分	森林航測		森林リモートセンシング		森林 GIS	
	認定校	準認定校	認定校	準認定校	認定校	準認定校
19 年度	—	静岡県立農林大学校	信州大学	鹿児島大学 ¹⁾ 日本大学 ¹⁾	三重大学	信州大学 鹿児島大学 日本大学 ¹⁾
18 年度	—	—	高知大学 ²⁾	千葉大学	島根県立農業大学校 長野県林業大学校 群馬県立農林大学校 高知大学 ³⁾	東京農業大学 山形大学
17 年度	—	京都府立大学	新潟大学 琉球大学 東京農工大学	日本大学 京都府立大学 高知大学	高知大学	日本大学 京都府立大学

1) 日本大学の森林リモートセンシング部門及び森林 GIS 部門は科目名等変更による再申請。

2) 18 年度森林リモートセンシング部門の高知大学は認定校への申請変更。

3) 18 年度森林 GIS 部門の高知大学は科目名変更による再申請。

平成19年度 林業技士及び森林評価士 合格者氏名

(平成19年度 森林系技術者資格認定合格者)

平成20年3月14日 社団法人 日本森林技術協会

- 林業技士制度は、森林・林業に関する専門的業務に従事する技術者を養成し、その技術水準を向上させることにより、わが国の森林・林業の発展に寄与することを目的として昭和53年から実施している。これまでに森林評価、森林土木、林業機械、林業経営、森林環境、林産及び森林総合監理の7部門で林業技士として登録された者は約9,700名に達しており、全国の林業経営や森林土木事業の第一線で活躍している。
- 平成19年度の林業技士養成研修及び資格認定審査の結果については、3月14日に開催した森林系技術者養成事業運営委員会（委員長：佐々木恵彦氏）による審査で、同研修修了者等の林業技士登録資格認定が下記のとおり決定した。
- これらの資格認定者には、（社）日本森林技術協会の林業技士名簿に登録することによって「林業技士」及び「森林評価士」の称号が付与され、森林整備事業の担い手としてその重要性が一層増加するものと期待されている。
- なお、林業技士制度は、平成19年度から5ヶ年ごとの登録更新が必要となった。

1. 養成研修の部（434名）

1. 森林評価部門（49名）

都道府県名	氏名
北海道	佐々木将統
北海道	須合 賢
北海道	唐箕 基
北海道	今田 秀樹
北海道	大森 丈士
北海道	笠倉 信暁
青森	日下 利明
岩手	菅野 浩幸
岩手	赤澤 由明
秋田	北嶋 豊
秋田	鈴木日出美
秋田	吉川 智
秋田	花田 健介
秋田	佐々木甲悦
秋田	佐々木 敦
山形	大地 広美
山形	渡部 俊広
山形	佐藤 弘行
山形	白井 利英
山形	井上由紀雄
群馬	永井 寛
埼玉	久下 武男
東京	山根 慎次
東京	米田 安範

2. 森林土木部門（86名）

都道府県名	氏名
新潟	斎藤 修一
長野	新津 清秀
長野	宮澤 重徳
長野	辰野 一夫
長野	伊藤 裕之
長野	綾瀬 傑
岐阜	桑田 喜夫
岐阜	大久保利文
愛知	植田 洋二
愛知	木内 桂
三重	木下 徹
奈良	佐藤 浩行
和歌山	市川 秀樹
徳島	濱田 浩二
愛媛	山下 直樹
愛媛	正岡 光彦
秋田	佐々木甲悦
秋田	佐々木 敦
山形	大地 広美
山形	渡部 俊広
山形	佐藤 弘行
山形	白井 利英
山形	井上由紀雄
群馬	永井 寛
埼玉	久下 武男
東京	山根 慎次
東京	米田 安範
山形	工藤 達也
神奈川	水上 正昭
新潟	斎藤 修一
長野	新津 清秀
長野	宮澤 重徳
長野	辰野 一夫
長野	伊藤 裕之
長野	綾瀬 傑
岐阜	桑田 喜夫
岐阜	大久保利文
愛知	植田 洋二
愛知	木内 桂
三重	木下 徹
奈良	佐藤 浩行
和歌山	市川 秀樹
徳島	濱田 浩二
愛媛	山下 直樹
愛媛	正岡 光彦
秋田	佐々木甲悦
秋田	佐々木 敦
山形	大地 広美
山形	渡部 俊広
山形	佐藤 弘行
山形	白井 利英
山形	井上由紀雄
群馬	永井 寛
埼玉	久下 武男
東京	山根 慎次
東京	米田 安範
山形	樋口 哲也
茨城	横須賀 徹
青森	滝内 康治
青森	藤田 勘
岩手	加瀬澤 黙
岩手	古澤 一峰
岩手	佐藤 宏実
岩手	伊原 健雄
岩手	平賀 史倫
岩手	竹林 正喜
岩手	金澤 優子
岩手	田代 公一
岩手	浅沼 一郎
岩手	長谷川 啓二
宮城	佐藤 高
宮城	櫻井 正
宮城	佐藤 昇
秋田	尾留川 陵一
秋田	熊谷 久代司
秋田	村上 幸二
秋田	小畠 隆男
秋田	佐々木政美
秋田	鈴木 悟
秋田	畠山 淳也
山形	池田 徹
山形	加藤 寛喜
山形	伊藤 泰広
山形	樋口 哲也
茨城	横須賀 徹
長野	湯沢 要次
長野	北原辰志
岐阜	飯沼 順司
岐阜	青木 良明
静岡	山本 法夫
静岡	古澤 辰郎
静岡	阿部 光
群馬	村上 義隆
群馬	前川 峰志
群馬	新谷 哲也
埼玉	佐保 昇児
埼玉	小松 広明
千葉	野田 龍
千葉	高橋 靖卓
東京	児島 知行
新潟	高野 広明
新潟	鈴木 隆
新潟	高橋 明夫
新潟	平賀 謙一
石川	三浦 一文
山梨	木内 利治
山梨	高柳 亘
山梨	清水 信之
長野	山本 健太
長野	宮沢 美紀恵
長野	大澤 和明
長野	中村 國彦
長崎	田村 長

長崎	朽原元樹
大分	大原雄二郎
宮崎	佐藤公一
宮崎	田原清信
宮崎	奈須隆男
鹿児島	新福一弘
鹿児島	池田 浩

広島	山岡 健史
福岡	上田 信義
長崎	久間 洋
大分	松尾 正信
宮崎	山口 俊二
宮崎	長谷川 仁
宮崎	金丸 俊雄
宮崎	蛯原 政志
鹿児島	橋 元和博

3. 林業機械部門(44名)

都道府県名	氏 名
北海道	丹治 昌徳
北海道	宮本 廣
北海道	真鍋 光幸
北海道	関口 昭彦
北海道	小西 幸一
青森	中野 渡悟
岩手	鈴木 信男
岩手	中田 勝
岩手	山内 達雄
宮城	石田 竜也
宮城	那須野 秋彦
秋田	佐藤 長悦
秋田	松渕 善弘
山形	丹 四郎
山形	遠田 勝一
山形	高橋 美智雄
山形	高橋 俊雄
福島	山下 公一
茨城	吉成 良二
茨城	堀江 賢一
茨城	神長 計
埼玉	畠 俊充
長野	中山 昭彦
岐阜	平野 喜隆
静岡	渡辺 善己
静岡	安間 訓明
三重	寒川 卓美
三重	服部 和徳
滋賀	窪内 晃
京都	竹内 一治
兵庫	八木 数也
兵庫	杉下 勇己
岡山	向井 王則
岡山	板坂 秀人
岡山	木村 淳二

宮城	太田 正敏
宮城	渡辺みきえ
宮城	島 貴智秀
宮城	中山真智子
秋田	佐藤 政敏
秋田	原嶋 広行
秋田	田口 優子
秋田	藤村 順子
秋田	遠藤 到
秋田	斎藤 誠司
山形	石山 豊
山形	荒生 勇
山形	五十嵐政典
山形	小関 一也
山形	皿谷 義幸
山形	平 昭美
福島	石黒けい子
福島	境原 尉夫
福島	千葉 ヤス子
福島	五十嵐幹哉
福島	広野 斗南
福島	草野 宏
茨城	谷田部 弘美
茨城	藤田 友晴
群馬	山本 雄吉
群馬	堀込 伸洋
群馬	斎藤 政幸
埼玉	森田 芳樹
千葉	高野 幸一
千葉	宮崎 治夫
東京	中井 康貴
神奈川	柳川 敏彦
神奈川	谷 善造
神奈川	栗原 昭一
神奈川	高橋 正二
神奈川	星山 豊房
神奈川	湯川 妃富
神奈川	湯川 直久
神奈川	岩本 光生
神奈川	井上 浩
神奈川	柴田 陽子
石川	野村 望
福井	辻端 武彦
岩手	西前 明男
宮城	照井 文貴子

長野	藤城 秀行
長野	小林 健
長野	曾根 成明
長野	横山 繁樹
長野	中野 忠夫
長野	片桐 浩
長野	柴垣 嘉和
長野	古谷 武仁
長野	川上 勝彦
長野	斎藤 誠司
山形	石山 豊
山形	荒生 勇
山形	五十嵐政典
山形	小関 一也
山形	皿谷 義幸
山形	平 昭美
福島	石黒けい子
福島	境原 尉夫
福島	千葉 ヤス子
福島	五十嵐幹哉
福島	広野 斗南
福島	草野 宏
茨城	谷田部 弘美
茨城	藤田 友晴
群馬	山本 雄吉
群馬	堀込 伸洋
群馬	斎藤 政幸
埼玉	森田 芳樹
千葉	高野 幸一
千葉	宮崎 治夫
東京	中井 康貴
神奈川	柳川 敏彦
神奈川	谷 善造
神奈川	栗原 昭一
神奈川	高橋 正二
神奈川	星山 豊房
神奈川	湯川 妃富
神奈川	湯川 直久
神奈川	岩本 光生
神奈川	井上 浩
神奈川	柴田 陽子
石川	野村 望
福井	辻端 武彦
岩手	西前 明男
宮城	照井 文貴子

兵庫	藤田 和則
兵庫	紀田 尚穂
兵庫	岡本 豊博
兵庫	高橋 照夫
兵庫	土田 寿一
兵庫	大槻 善明
兵庫	芦田 錦二
兵庫	辻 浩志
兵庫	緒方 秀樹
兵庫	竹池さゆり
兵庫	西谷 賢一
兵庫	梶本 和志
兵庫	福本 秀之
兵庫	本庄 修
兵庫	野口 壱弘
兵庫	藤江 亮彦
兵庫	安達日出雄
兵庫	垣尾 隆一
兵庫	杉本 昌義
兵庫	大中一正
兵庫	永峰 雅史
兵庫	片岡 実
兵庫	杵岡 望
兵庫	石原 武典
兵庫	前田 将吾
兵庫	立道 史朗
兵庫	秋田 博之
兵庫	杉本 明彦
兵庫	奥井 正晴
兵庫	株本 義文
兵庫	中島 武
兵庫	植野 浩二
兵庫	山田 重裕
兵庫	西村 周子
奈良	植田 洋一
奈良	中前 徳明
奈良	折笠 世紀
奈良	瀧本 健逸
奈良	原 靖
奈良	南尾 親弘
奈良	川島 健児
奈良	高澤 正子
奈良	松本 好史
奈良	樋口 潤子
奈良	樋口 幸男

4. 林業経営部門(218名)

都道府県名	氏 名
北海道	丹治 昌徳
北海道	宮本 廣
北海道	真鍋 光幸
北海道	吉田 栄一
北海道	阿垣 俊正
北海道	寺西建太郎
北海道	伊藤喜美雄
北海道	祐川 順一
北海道	田中 将文
北海道	松永 直樹
北海道	矢田 博次
北海道	鎌中 達
北海道	飯田 康弘
北海道	藤本 鐵男
北海道	石原 祐次
北海道	石原 憲次
北海道	中口 泰平
北海道	西井 孝紀
茨城	吉成 良二
茨城	堀江 賢一
茨城	神長 計
埼玉	畠 俊充
長野	中山 昭彦
岐阜	平野 喜隆
静岡	渡辺 善己
静岡	安間 訓明
三重	寒川 卓美
三重	服部 和徳
滋賀	窪内 晃
京都	竹内 一治
兵庫	八木 数也
兵庫	杉下 勇己
岡山	向井 王則
岡山	板坂 秀人
岡山	木村 淳二

奈 良	岡下 育 枝
奈 良	岡下 妙 美
奈 良	的 場 真 一
奈 良	中 岡 勝 利
奈 良	鹿児島 佐 渡 保 信
奈 良	山 室 やす 代
奈 良	鹿児島 牧 野 耕 宇
奈 良	樋 口 利 憲
奈 良	岸 本 彦 照
奈 良	下 西 二 郎
奈 良	中 村 高 明
奈 良	和 田 多 鶴 子
奈 良	福 田 秀 俊
和 歌 山	和 田 和 紀
和 歌 山	杉 本 和 紀
高 知	高 田 明 子
島 根	青 木 陽 一
広 島	新 田 政 規
広 島	吉 見 寛
広 島	吉 川 浩 二
高 知	吉 門 誠
高 知	小 松 正 幸
高 知	小 野 川 敏
高 知	和 田 哲 浩
佐 賀	盛 田 る み
長 崎	山 崎 克 彦
長 崎	三 岳 孝 裕
長 崎	高 井 和 信
長 崎	横 山 章
長 崎	梅 野 明 正
熊 本	菅 廣 助
熊 本	鳥 羽 瀬 正 志
大 分	和 田 正 明
大 分	奥 村 剛
宮 崎	宮 崎 前 和 宏
宮 崎	那 須 留 治
宮 崎	宮 崎 長 友 幹 雄
宮 崎	宮 崎 立 山 豊
宮 崎	宮 崎 加 塩 洋 一
宮 崎	宮 崎 山 下 史 洋
宮 崎	宮 崎 上 原 正 也
宮 崎	宮 崎 中 石 健 二
宮 崎	宮 崎 長 野 将 一 郎
宮 崎	宮 崎 奥 村 泉
宮 崎	宮 崎 篠 村 文 彦
宮 崎	宮 崎 児 玉 三 郎
宮 崎	宮 崎 永 峯 勝 久
宮 崎	宮 崎 永 徳 英 和

宮 崎	鶴 永 重 則
鹿 児 島	池 松 武 史
鹿 児 島	萬 造 寺 芳 博
鹿 児 島	佐 渡 保 信

広 島	豊 原 稔 和
長 崎	山 口 健 司
宮 崎	佐 多 直 久

岩 手	及 川 雅 文
岩 手	小 山 啓 一
岩 手	福 士 克 範
岩 手	大 下 浩 司
岩 手	小 向 明 彦
岩 手	松 田 拓 美
岩 手	菊 池 謙 一
岩 手	及 川 敏 幸
岩 手	佐 藤 吉 範
岩 手	武 田 茂 樹
岩 手	中 村 丈 夫
岩 手	菊 池 福 道
岩 手	坂 本 光 弥
岩 手	青 名 畑 勝 明
岩 手	水 上 清 美
宮 城	坂 元 謙
宮 城	大 場 孝 司
宮 城	山 崎 文 雄
宮 城	河 原 淳
宮 城	佐 々 木 伸 幸
秋 田	佐 々 木 紀 之
秋 田	小 林 春 美
山 形	鈴 木 友 晴
山 形	遠 藤 要 一
山 形	嘉 藤 広 明
山 形	須 藤 勇 一
山 形	兼 子 隆 博
山 形	星 川 直 也
山 形	辺 見 淳 一
山 形	志 田 賢 一
山 形	綱 淵 浩 生
山 形	成 田 開
山 形	土 屋 洋
福 島	早 山 明 俊
福 島	芳 賀 忠 男
福 島	佐 久 間 喜 好
福 島	丸 予 光 一
福 島	小 沼 健 一
福 島	佐 藤 一 弘
福 島	八 卷 雄 一
福 島	尾 形 広 美
福 島	岡 崎 吉 一
福 島	阿 部 和 弥
福 島	高 橋 宏 治
茨 城	中 野 章

栃 木	小 林 康 彦
栃 木	荒 井 渉
栃 木	田 代 勝 已
栃 木	熊 田 克 清
栃 木	阿 部 泰 之
栃 木	皆 川 俊 政
栃 木	齊 藤 孝 宏
群 馬	北 爪 和 雄
群 馬	大 川 弘 志
群 馬	宮 崎 清 史
群 馬	吉 野 昇
群 馬	吉 田 正
埼 玉	山 下 英 治
埼 玉	関 口 誠
神 奈 川	府 川 清
神 奈 川	伊 藤 隆
新 潟	戸 田 東 一
新 潟	小 野 塚 修
新 潟	高 橋 春 雄
新 潟	高 橋 一 行
新 潟	船 久 保 忠
新 潟	浅 井 正 信
新 潟	桜 沢 博
新 潟	志 賀 浩 己
新 潟	石 田 政 春
新 潟	富 永 芳 正
新 潟	大 平 善 司
富 山	畔 田 芳 則
山 梨	有 泉 和 久
山 梨	有 泉 秋 雄
山 梨	谷 內 政 雄
山 梨	知 見 篤
山 梨	朝 比 奈 充 弘
山 梨	中 沢 卓 美
長 野	中原 増 実
長 野	大 島 賢 悟
長 野	米 山 安 人
長 野	林 道 夫
長 野	小 林 正 文
長 野	櫟 木 伸 一
長 野	荒 井 克 己
長 野	斎 藤 浩 実
長 野	那 須 野 彰
長 野	桃 沢 傳
長 野	小 平 芳 司

5. 森林環境部門(25名)

都道府県名	氏 名
北海道	鳴 海 秋 幸
北海道	那 須 祐 司
北海道	木 村 孝 義
青 森	成 田 達 美
岩 手	佐 賀 耕 太 郎
山 形	高 橋 俊 広
山 形	庄 司 透
千 葉	山 口 勝 広
新 潟	戸 田 ひ ろ み
長 野	稻 辺 謙 次 郎
静 岡	高 橋 勝 彦
静 岡	山 下 秀 康
静 岡	石 橋 彰
静 岡	齋 藤 弥 生
三 重	小 宮 宏 之
京 都	井 上 雅 晶
兵 庫	茨 木 正 人
奈 良	山 室 潔
広 島	才 野 貴 恵
山 口	小 枝 登
長 崎	上 原 正 康
熊 本	江 口 俊 一
宮 崎	田 之 上 裕 明
宮 崎	佐 藤 幸 男
鹿 児 島	原 田 義 彦

6. 森林総合監理部門(12名)

都道府県名	氏 名
北海道	劉 大 力
北海道	高 谷 俊 和
青 森	菅 原 利 耕
岩 手	吉 田 宏
群 馬	田 川 隆 太 郎
埼 玉	吉 田 正 樹
東 京	関 厚
岐 阜	安 江 錄 臣
宮 崎	河 邊 昭 男

岐阜	南 賢太朗
岐阜	中林光起
岐阜	南 潔孝
岐阜	木一勝之
岐阜	三尾正樹
岐阜	勝野樹生
岐阜	小峠真治
岐阜	下條仁
岐阜	石徹白秀也
岐阜	萱畠正治
岐阜	本田慶次
岐阜	牛丸聰
岐阜	松葉修一
岐阜	中田直太郎
岐阜	島光芳典
岐阜	林俊宏
岐阜	奈良村徳明
岐阜	山田福美
岐阜	加藤正規
静岡	堺 喜治
静岡	市川保夫

静岡	松下裕司
静岡	竹下敏雄
静岡	平田 覚
静岡	石神昌代
静岡	太田宜雅
静岡	鈴木良樹
静岡	青島英昭
愛知	百武秀道
愛知	中桐早苗
三重	土居弘直
三重	前田 豊
兵庫	三辻嘉明
兵庫	森口裕子
兵庫	寺下 正
兵庫	田中基文
兵庫	田邊正樹
兵庫	小堀 彰
兵庫	北條 公
兵庫	松本貞人
兵庫	松下宣夫
兵庫	藪中 保

兵庫	松本二郎
奈良	高崎浩司
奈良	南尾親弘
奈良	川島健児
奈良	川口 進
奈良	田ノ下智康
島根	濱田浩徳
広島	井上敏之
徳島	續 俊
徳島	上西正男
徳島	岩本慎二
徳島	上西朝子
徳島	岡崎利彦
徳島	藤川 勇
徳島	清水 久
徳島	工藤久美子
徳島	吉方順司
徳島	六車壽男
徳島	富田倍生
愛媛	窪田嘉幸
長崎	小松正人

高知	松下充宏
高知	三浦新平
高知	山崎庸誠
高知	山崎秀治
高知	田鍋 仁
高知	石村啓純
高知	山崎一志
高知	大塚敦士
高知	古田啓一
高知	河野忠晃
高知	森本昌宏
高知	萩野憲生
高知	森沢明彦
高知	松本武司
長崎	田中紀久男
長崎	糸瀬正人
長崎	糸瀬清昭
長崎	糸瀬三代喜
長崎	山崎弘文
長崎	廣田達実

長崎	豊田直敏
長崎	江頭徳嘉
熊本	橋本 護
熊本	田一幸
宮崎	町田 健
宮崎	児玉宏雄
宮崎	別府祐一郎
宮崎	前田 栄
宮崎	濱崎光徳
宮崎	竹村良幸
宮崎	永野正文
宮崎	高橋和孝
宮崎	堀江安幸
宮崎	栄 浩一郎
宮崎	津曲律子
宮崎	河野典明
鹿児島	大園敬志郎
鹿児島	岩下智洋
鹿児島	加治屋健一
鹿児島	新俊治

もり 『まちの森林づくり10余年』—宮下國弘氏を偲んで

●住民ボランティア結成される

1977年に作られた都会の大規模高層マンションにある森林緑地は、住民の憩いの楽園であったが、10年も経つと樹林は密林化し、住宅周辺では日照障害などの問題が出てきた。これを自分たちの手で解決する実行部隊として結成された住民ボランティアのさまざまな試みと失敗、そしてささやかな成功。都会の大規模集合住宅にある雑木林の管理を巡る苦闘と喜びを取りまとめたものが、本書である。

●合意形成に始まり、合意形成に汗を流し、合意形成で進む

都会のマンションの森林緑地の管理は、さまざまな考え方を持つ住民の合意形成を得ながら行うことが基本であり、ボランティアの最も苦労するところという。

地道な活動に加え、理事会の植栽委員の増員、シンポジウムの開催、マスコミ取材などで、住民の植栽維持管理についての合意形成は得られやすくなってきたが、いざ自らの身近な問題になって

くると難航するのが現実。

このため「緑の管理目標」に基づき、具体的な管理モデル仕様が住民の賛同を得て、実行され、この難問題を解決している。無煙化炭焼き装置のように、特許申請するほど本格的な取組みも…。また、焼いも会などでボランティアの参加意欲を引き出し、マスコミ取材などは、特定の人での対応は避けるという…。

ハードとソフトの両面の取組みは、同じような悩みを抱える住民ボランティアにとって汲み取るところが多いのではないか。

●森林の静寂

豊かな静寂のこの森林で、長年、ボランティアの一人としてご活躍され、この本の著者の一人でもある宮下國弘氏は、この本の発行を見届けるように、この3月17日に亡くなられた。編集に当たり、お会いした本年1月に「この森林と森づくりで汗を流した仲間の思いを伝えたい」と熱く語られたのが、印象的であった。ご冥福をお祈りいたします。

(普及部編集担当)

本誌原稿執筆に際してのお願い

- 皆様には平素よりご厚情を賜り厚く御礼申し上げます。新年度にあたり、本誌に原稿をお書きいただく際にご注意願いたいことを述べさせていただきます。また、本誌編集作業の流れを紹介させていただきますので、参考としていただけましたら幸いです。
- 本文原稿は、テキストデータを希望します。ルビが必要な場合は、（ ）書きとしてください。例：丸瀬布（まるせっぷ）では～
- 図表原稿は、本文原稿とは別ファイルにまとめてください。エクセルなどで作成されたグラフ類は、入力数値などを付けたまま入稿していただくことを希望します。本誌はモノクロ印刷ですので、カラー仕上げされたグラフをそのまま使用した場合、グラフの識別が困難となりがちです。例えば「色指定」をモノクロの「網指定」などに素早く変換することができます。
- 写真原稿は、1点1ファイルとしてください。あまり軽いファイルだと、印刷効果が非常に悪くなる場合があります。誌上での仕上りサイズによっても異なりますが、誌上での仕上りが左右70ミリ程度（2段組みの場合の片段）でしたら、最低でも100キロバイト以上、できましたら500キロバイト程度はほしいところです。
- 主タイトルと副タイトルは、それとわかりやすいようにお書きください。
- 本文には、適宜小見出しを付けてください。
- 入稿は、電子メール添付の形を希望します。ただし、当協会のメール環境は、1通あたり10メガまでとなっておりますので、超える場合は分割などをお願いいたします。
- ご執筆に際しての原稿分量のご確認、レイアウトの意図をお示しいただくために、例えば「ワード」ファイルなどをお付けいただくことは大歓迎です。ただし、編集の都合から写真類は、単独ファイルを必ず別に添付してください。また、お示しいただきましたレイアウトは大いに参考とさせていただきますが、誌面の規格や編集の都合から、必ずしもご希望に沿えない場合がございます。予めご容赦ください。
- 原稿は原則として返却申し上げません。特にご希望の場合は、その旨を明記願います。

*

- 筆者に一所懸命お書きいただいた原稿は、編集者にとって宝も同然です。そこで、本文をひととおり読み、誤字脱字はもちろん、常用音訓等の過不足ない表記に整理します。本文中の図表番号と実際の図表が合っているかどうかを確認し、レイアウト指示を付けて制作に回します。
- 制作から組み上がって戻ってきたものが「初校」になります。細部を確認し、著者校正をお出しします。筆者から戻った指示を再び制作に回し、戻ったものに修正の要がなければ無事「校了」となります。実際にはこまごまとしたチェック、調整の連続で、1号を「校了」にできたときには、皆さんへの感謝の気持ちでいっぱいになります。

(社)日本森林技術協会第63回通常総会ならびに関係行事のお知らせ

総会ならびに関係行事を次のとおり開催いたしますので、ご出席くださいますようご案内申し上げます。

なお、総会は、定款第7条に基づく社員により構成されるということになっています。したがいまして、支部代表会員（社員）及び本部直結社員以外の会員におかれましては総会のオブザーバー（傍聴）としてのご出席になります。

注) 時間帯は今後変更する場合があります。

月 日	行 事	時 間	場 所
5月27日(火)	理事会 第63回通常総会 第54回森林技術賞受賞者の表彰 第19回学生森林技術研究論文コンテスト 受賞者の表彰 第12回日本森林技術協会学術研究奨励金 対象者の発表 議事 支部幹事会 支部幹事等との懇談会	12:00～13:30 14:00～15:20 16:00～17:00 17:00～19:00	日林協会館内 会議室 (東京都千代田区六番町7)

協会のうごき

●人事異動●

辞任…理事長=根橋達三、理事=本山芳裕（平成 20 年 3 月 31 日付け）

退職…地球環境部上席技師＝富村良二、企画部主任技師＝宮部秀一、情報技術部長＝望月 繁、航測部上席技師＝渡邊準藏、航測検査部主任調査員＝野村 章、北海道事務所主任研究員＝大島紹郎（平成20年3月31日付け）

訂 正

お詫び申し上げます

- 3月号 p12 の式(2) ⇒ $V = \sum (10^{\wedge}(-a \cdot X_n + b) \times V_n)$
(10 の階乗に訂正)
 - 3月号 p35 右段 5 行目・再び技術士として ⇒ 再び林業技士として

雜記

東京・四谷の桜が4月に入ると同時に散り急ぐさまは、近年見慣れた風景となった。しかし、今朝方モミジの花が深紅に色付いているのにはさすがに驚いた。温暖化の影響かは定かでないが、春が早く短くなっているという感覚は強まるばかりだ。京都議定書の約束期間がスタートしたこの春、CO₂削減にむけて皆さんは何をはじめますか？（自由ひと）

投稿募集

会員の皆様からのご投稿を随時
募集しています。

400字×4枚(1,600字)程度、
400字×8枚(3,200字)程度、
400字×12枚(4,800字)程度に
おまとめいただき、プリントアウ
トした用紙とデータを入れたCD
を本会までお送りください。

〒102-0085 千代田区六番町7
日本森林技術協会『森林技術』
編集担当：吉田 功・志賀恵美
(Tel 03-3261-5414)

森 林 技 術 第 793 号 平成 20 年 4 月 10 日 発行

編集発行人 喜多 弘 印刷所 株式会社 太平社

発行所 社団法人 日本森林技術協会 © <http://www.jafta.or.jp>

〒102-0085 TEL. 03 (3261) 5281(代)

東京都千代田区六番町 7

FAX 03 (3261) 5393(代)

千代田区六番町 7 FAX 03 (3261) 5393(代)

振替 00130-8-60448 番

Digitized by srujanika@gmail.com

SHINRIN GIJUTSU published by
JAPAN FOREST TECHNOLOGY ASSOCIATION
TOKYO JAPAN

〔普通会費 3,500 円・学生会費 2,500 円・法人会費 6,000 円〕

図書のご案内 (日本森林技術協会発行)

まちの森林（もり）づくり10余年
—住民ボランティア奮戦記—

金本一夫・宮下國弘 著

●定価：本体 1,200 円+税 A5 判 130 ページ 送料：実費 (H19 年度会員配布図書)

●まちの森林（もり）づくりに立ち上がった住民ボランティア活動のさまざまな試みと失敗。都会の大規模集合住宅地内にある雑木林の管理を巡る苦闘を取りまとめたもの。マンション管理組合必読、必携の書!!

タウヌス
—輝ける森の日々—

杉野千鶴 著

●定価：本体 1,200 円+税 A5 判 140 ページ 送料：実費 (H18 年度会員配布図書)

●ドイツ中西部に位置するなだらかな山地、タウヌス。一人の市民としてこの森に親しんだ著者の美しい文章でつづられた散文風隨筆だが、「自然」が実は造られたものであること、経済との調和がたゆまない努力の上にあることに気づいていく……。

●お問い合わせ・お求めは…… (社)日本森林技術協会 販売担当まで。

〒102-0085 東京都千代田区六番町7 TEL 03-3261-6952 FAX 03-3261-5393

●お申込は、お名前、〒、お届け先、電話番号、冊数を明記のうえ、ファクシミリにて願います。

●お支払いは、送付図書同封の振替用紙によってください。

基本性能を徹底追求したタマヤの「PLANIX シリーズ」。

ベストセラーモデルPLANIX 7が、ポイント・連続測定機能を得て、さらに使い易く、高性能に進化。

線長・面積測定
に特化！

PLANIX 10S

●PLANIX 10S……………¥98,000



あらゆる図形の座標、区間長、線長、面積と半径、角度、図心の豊富な測定機能！

- グラフィック液晶で分かり易い漢字表示
- 座標、区間長、線長、面積の同時測定機能
- 半径、角度、図心の豊富な測定機能
- 座標読み取り機能と補正機能
- ±0.1%の高精度
- 直線と曲線の2つの測定モード
- 自動閉塞機能
- 自動収束機能
- 自動単位処理機能
- 測定値の平均・累積機能
- 電卓機能
- 小数点桁の指定
- 外部出力機能
- ナンバーリング機能
- バッテリ残量チェック機能
- オートパワーオフ機能

PLANIX EX

●PLANIX EX……………¥160,000

●PLANIX EXプリンタ付…¥192,000



※この他に、A2判対応のPLANIX EX-Lモデルも用意されています。



TAMAYA

タマヤ計測システム 株式会社 <http://www.tamaya-technics.com>

〒140-0013 東京都品川区南大井6-3-7アーバンネット南大井ビル7F ☎03-5764-5561, FAX(末尾)5565

平成 20 年度「民間実用化研究促進事業」のお知らせ

独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構生物系特定産業技術研究支援センター（生研センター）では、平成 18 年度より、農林水産研究基本計画に即して農林水産業、食品産業、醸造業等の向上に資する画期的な生物系特定産業技術の開発を促進することを目的として、民間における実用化段階の研究開発に資金を提供する事業を開始しており、平成 20 年度においても、引き続き本事業を実施することとしています。この事業は、提案公募による委託方式（日本版バイ・ドール条項を適用した委託方式）で行うもので概要は以下のとおりです。

- 研究開発期間：原則として 3 年間。
- 研究開発費の規模：1 課題あたり 1 億円程度／年が上限（下限は定めていないので小規模でも可）
- 提案資格：生物系特定産業技術の実用化段階の研究開発を行っている国内の民間の登記法人
- 公募期間：平成 20 年 4 月 14 日（月）～5 月 16 日（金）

公募要領等の詳細につきましては、下記のホームページをご覧下さい。

<http://brain.naro.affrc.go.jp/tokyo/marumin/kouboannai/annnai.htm>

＜担当＞

（独）農業・食品産業技術総合研究機構 生物系特定産業技術研究支援センター（生研センター）
新技術開発部 民間研究促進第 1 課 能登、向江
Tel 03-3459-6565 Fax 03-3459-6566
E-mail : minkanken08 @ ml.affrc.go.jp URL : <http://brain.naro.affrc.go.jp/tokyo/>

TOKKOSEN

トウモロコシから生まれた纖維（ポリ乳酸纖維）で作りました

ニホンジカ・ウサギ・カモシカ等
の枝葉食害・剥皮防護資材

幼齢木ネット

・ネットを使用する事で CO_2 の
削減に効果があります

* 1000 本でおよそ 130kg の削減効果があります

（幼齢木ネットをポリエチレン製にした場合と対比）

* 支柱等部品はポリ乳酸製ではありません

問合せ先 東工コーセン株式会社

〒541-0042 大阪市中央区今橋2-2-17今川ビル

TEL 06-6229-1600

FAX 06-6229-1766

e-mail:forestagri@tokokosen.co.jp



<http://www.tokokosen.co.jp> <写真>山梨県:イチイ

日本森林技術協会は『緑の循環』認証会議(SGEC)の審査機関として認定され、〈森林認証〉〈分別・表示〉の審査業務を行っています。



日本森林技術協会は、SGECの定める運営規程に基づき、公正で中立かつ透明性の高い審査を行うため、次の「認証業務体制」を整え、全国各地のSGEC認証をご検討されている皆様のご要望にお応えします。

【日本森林技術協会の認証業務体制】

1. 学識経験者で構成する森林認証審査運営委員会による基本的事項の審議
2. 森林認証審査判定委員会による個別の森林および分別・表示の認証の判定
3. 有資格者の研修による審査員の養成と審査員の全国ネットワークの形成
4. 森林認証審査室を設置し、地方事務所と連携をとりつつ全国展開を推進

日本森林技術協会システムによる認証審査等

事前診断

- ・基準・指標からみた当該森林の長所・短所を把握し、認証取得のために事前に整備すべき事項を明らかにします。
- ・希望により実施します。・円滑な認証取得の観点から、事前診断の実施をお勧めします。

認証審査

- ・現地審査
 - ・結果の判定
- 申請から認証に至る手順は次のようにになっています。
<申請>→<契約>→<現地審査>→<報告書作成>→<森林認証審査判定委員会による認証の判定>→<SGECへ報告>→<SGEC認証>→<認証書授与>

書類の確認、申請森林の管理状況の把握、利害関係者との面談等により審査を行います。

現地審査終了後、概ね40日以内に認証の可否を判定するよう努めます。

認証の有効期間

5年間です。更新審査を受けることにより認証の継続が行えます。

管理審査

毎年1回の管理審査を受ける必要があります。

(内容は、1年間の事業の実施状況の把握と認証取得時に付された指摘事項の措置状況の確認などです。)

認証の種類

「森林認証」と「分別・表示」の2つがあります。

1. 森林認証

持続可能な森林経営を行っている森林を認証します。

・認証のタイプ

多様な所有・管理形態に柔軟に対応するため、次の認証タイプに区分して実施します。

①単独認証 (一人の所有者、自己の所有する森林を対象)

②共同認証 (区域共同タイプ:一定の区域の森林を対象)

(属人共同タイプ:複数の所有者、自己の所有する森林を対象)

③森林管理者認証 (複数の所有者から管理委託を受けた者、委託を受けた森林)

・審査内容

SGECの定める指標(36指標)ごとに、指標の事項を満たしているかを評価します。

満たしていない場合は、「懸念」「弱点」「欠陥」の指摘事項を付すことがあります。

2. 分別・表示

認証林産物に非認証林産物が混入しない加工・流通システムを実践する事業体を認証します。

・審査内容

SGECの定める分別・表示システム運営規程に基づき、入荷から出荷にいたる各工程における認証林産物の、①保管・加工場所等の管理方法が適切か、②帳簿等によって適切に把握されているか、を確認することです。

【諸審査費用の見積り】	「事前診断」「認証審査」に要する費用をお見積りいたします。①森林の所在地(都道府県市町村名)、②対象となる森林面積、③まとまりの程度(およその団地数)を、森林認証審査室までお知らせください。
【申請書の入手方法】	「森林認証事前診断申請書」「森林認証審査申請書」、SGEC認証林産物を取り扱う「認定事業体登録申請書」などの申請書は、当協会ホームページからダウンロードしていただくか、または森林認証審査室にお申し出ください。

◆ SGEC の審査に関するお問い合わせ先:

社団法人 日本森林技術協会 森林認証審査室

〒102-0085 東京都千代田区六番町7 Tel 03-3261-5516 Fax 03-3261-5393

●当協会ホームページでもご案内しています。[http://www.jafta.or.jp]

日本森林技術協会編 森林の100不思議シリーズ

- 森林の100不思議（1988）：知っていますか？森と木の科学を。ミクロの世界から地球的規模の話まで、おもしろくてためになる森林の秘密100。当たり前のこと、正しいと思っていたことの意外な事実とは…。定価1,030円（本体981円）
- 森と水のサイエンス（1989）：知っていますか？地球の生態系を形づくる森と水の働きを。地球の水の循環過程を追い、私たちの暮らしを支える貴重な水を貯留し浄化する森林のメカニズムとは…。定価1,050円（本体1,000円）
- 土の100不思議（1990）：知っていますか？私たちの生活を豊かにする驚くべき土の働きを。私たちの生活に密着した働きとは？土を豊かにしている生き物とは？植物とのかかわりや土の中で起こっていることとは…。定価1,050円（本体1,000円）
- 森の虫の100不思議（1991）：知っていますか？自然界での虫の役割を。ほかの動物や気候風土などをも含めた複雑なシステムの下で、栄枯盛衰を繰り返す森の虫たちの姿とは…。森の虫の小百科。定価1,223円（本体1,165円）
- 続・森林の100不思議（1992）：知っていますか？もの言わぬはずの木や草が、ひそかにささやき合っている事実を。カビや細菌が果たす重要な役割とは？木材をはじめとする森林の産物の意外な事実とは…。定価1,223円（本体1,165円）
- 熱帯林の100不思議（1993）：知っていますか？世界の森林が熱帯林を中心に減少し続けている事実を。種の多様性とは？巨大な炭素の蓄積とは？構造や相互関係の複雑さなどの中から読み取る熱帯林の秘密100。定価1,223円（本体1,165円）
- 森の動物の100不思議（1994）：知っていますか？森に住む動物たちのさまざまな暮らしぶりを。森の恵みを受け、森の世代交代を手伝いながら生きている森の動物たちのオモシロ生態や行動の意味とは…。定価1,223円（本体1,165円）
- 木の100不思議（1995）：知っていますか？自然に優しく暮らしに役立つ身近にある木材の豊かな世界を。森の中で自然環境を保ってきた木は木材となって役に立ち、やがて土にかかり、そして何度も生まれかわる木（材）の姿とは…。定価1,223円（本体1,165円）
- 森の木の100不思議（1996）：知っていますか？ナンジャモンジャの木の正体を。奇想天外という名の木もある文字どおり不思議に満ちた樹木のあれこれ。そのしたたかな暮らしぶりとは…。定価1,223円（本体1,165円）
- きのこの100不思議（1997）：知っていますか？世界最大の生物はきのこの仲間ということを。健康によい成分をたくさん含むきのこ。命を奪うほどの猛毒を秘めているきのこ。森の妖精と呼ぶにふさわしいきのことはいったい…。定価1,260円（本体1,200円）
- 森を調べる50の方法（1998）：知っていますか？木の身長・胸囲の測り方を。森にはいろいろな顔があります。森をもっとよく知り、もっと楽しむための、わかりやすい森の調べ方教室。定価1,365円（本体1,300円）
- 森林の環境100不思議（1999）：知っていますか？大いなる出会いの不思議を。大気と大地の接触面に森林は育ち、人間はそこから数え切れないほどの恩恵を受けてきました。四者の出会いが織りなす世界とは…。定価1,365円（本体1,300円）
- 里山を考える101のヒント（2000）：日本人の心の故郷、里山。自然のなごり漂う生活の場、里山が人々をひきつけ、見直されているのはなぜか…。里山を訪ね、里山に親しみ、里山を考えるためのヒント集。定価1,470円（本体1,400円）
- ウッディライフを楽しむ101のヒント（2001）：知らないうちに地球に貢献。捨てる部分がない「木」、変幻自在の「木」、気候風土と一体の「木」。木のある暮らしを楽しむための絶好のヒント集。定価1,470円（本体1,400円）
- 森に学ぶ101のヒント（2002）：山歩きの楽しみ方は各人各様。もっと知りたい、自分なりの発見をしたい。こうした楽しみに応えてくれるものを持っています。見えるもの、聞こえるものを増やすためのヒントが満載。定価1,470円（本体1,400円）
- 森の野生動物に学ぶ101のヒント（2003）：野生動物（哺乳類・両生類・は虫類）の暮らしぶり、生態系を乱す外来種の問題など、森の動物たちの世界に注目。動物たちに学び親しむための新たなヒント集。定価1,470円（本体1,400円）
- 森の野鳥を楽しむ101のヒント（2004）：私たちにとってとても近い存在なのに、あまり注意して見られない野鳥たち。でもそこには息を呑むような彼らの世界があるのです。本書をヒントに鳥と遊んでみませんか。定価1,470円（本体1,400円）
- 森の花を楽しむ101のヒント（2005）：森林にかかわる人々が、その仕事や研究成果の一部をわかりやすく説明するとともに、花との出会いの中で得られたさまざまなエピソードや花への想いなども紹介。森の花を楽しむための絶好のヒント集。定価1,575円（本体1,500円）

お求めは、お近くの書店または
直接東京書籍（☎03-5390-7531）までどうぞ。